

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



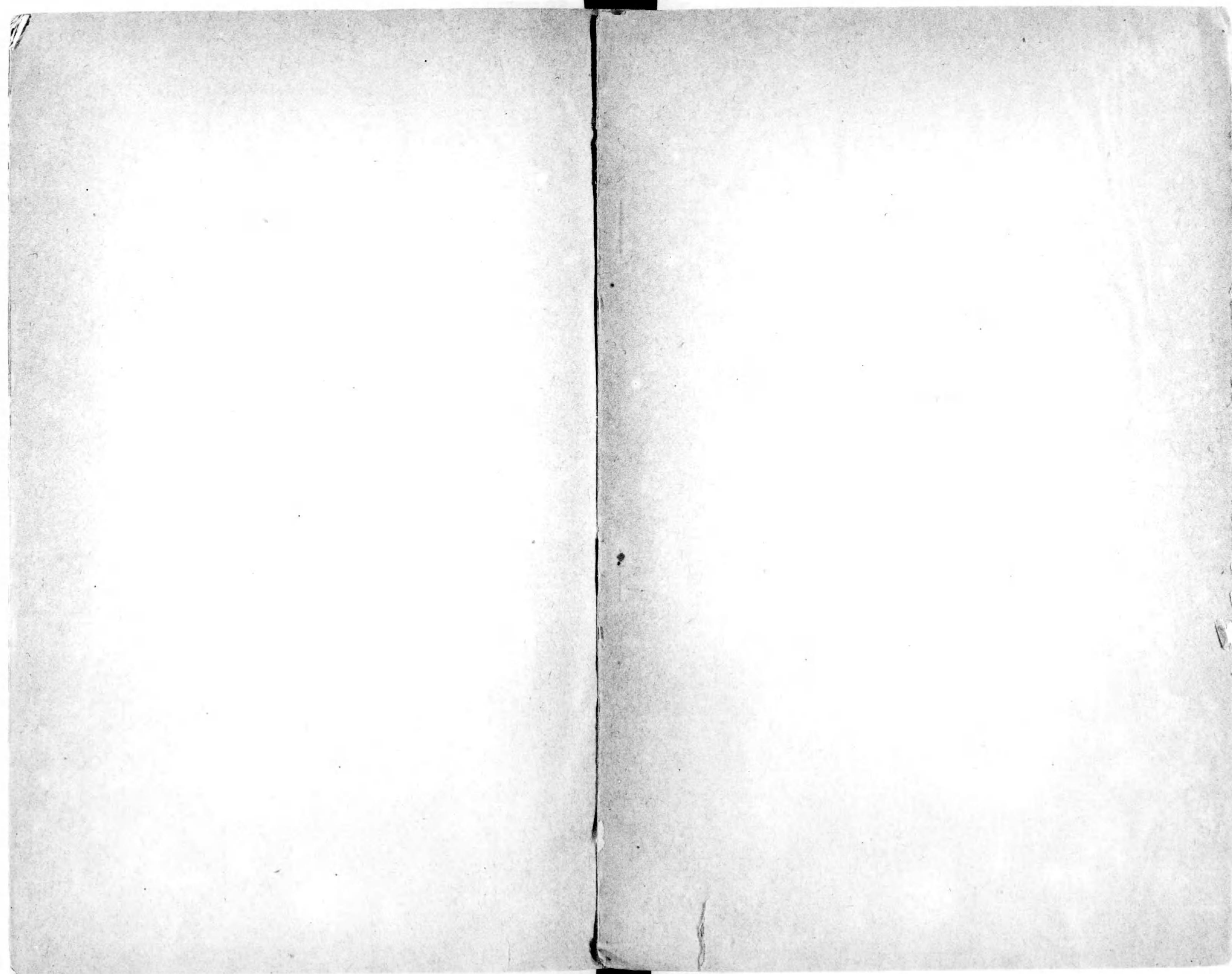
和田天華作
八幡白帆畫

おとし兒こ

(後編こ)



大阪 樋口隆文館發行



特105
208



おとし
兒^こ

(編後)

八和
幡田
白天
帆華
畫作

大正
4. 6. 12
内交





白
 白

■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	新	匿	同	同	小	嶋	同	同	鹿	泉	同	行	同	同	同	同	江
同	同	田	名	同	同	嶋	川	同	同	嶋	鏡	同	友	同	同	同	同	見
		静	子			孤	七			櫻	花		李					水
		海	作			舟	石			巷	花		風					隆
		作				作	作			作	作		作					作

愛富戀可梅春花罪海戀女七因龜女探大泣三
 の 憐 待 咲 の の 賊 偵 正 か
 と の の 花 つか 豪 敗 三 本 果 甲 馬 五 怪
 淵 棄 の 人 ぬ
 財力瀨兒録人家 傑者人櫻經組賊娘女女人

の大多に上紙開新の地各西東は物版出の箱文隆口樋
 い白面極至もでん讀みれど付に物るだし博を評好



名
物



山
田
文

同
愛
と
財



おとし

おとし兒(後編)

和田天華

(一) 三筋の糸 (其一)

「娘かい、娘は別に變つたこともなかつたやアよ、少し沈んではゐたらうがな」

「老爺さん、兎に角斯うしてはゐられない、之から一緒に行きませう、さア行きませう」

正也は頗る慌てふためいた體で、そのまゝ立ち上る袖を、甚兵衛はグイと引き止めて。

「池田さん、ド、何處へ行くだア、まア、ワ、譯を聞かなきゃア、一緒にも行かれ

見しお



ねえちやアねえか」

「ウム、それも然うですがね、兎に角二十騎町へ行つてからのことにしませう」

「ナニ、二十騎町？、そんなら俺が自宅へ歸へるのか、アハハハハハ、何もそんなに慌てることはねえだアよ、まア一通話をさつしやい」

甚兵衛に引き止められて、正也は心ならずも、一まづ腰を落ちつけ、まだ息を吻ませながら。

「實は老爺さん、誠に面目ない話だが……」

と、胃頭を置いて、例の差押さへの一條を委しく物語り。

「僕が斷然お斷りをしたにも拘らず、冬子さんは自分に責任を負ふて、老爺さんを欺して、千六百圓の貯金を引き出し、衣類調度まで典物にして、まだ不足を生じたものですから、ゲ、藝者になつて、五百圓の金を借りて、ソ、それで二千三百圓ほどの金を纏め、昨日緒方の處へ行つて金を返して、これ、此の通り證書まで取り返

して、それを僕の處へ送つて寄越したので……」

正也は概畧の事を物語つて、如何にも心外らしくまた溜息を吐いた。

果然、果然！、冬子が數日奔走して得たかの五百金は、實に身を賣つて調べた、血の出る金である、彼女は一身を犠牲にして、意地と義理のために殉したのであつた。

斯と聞いた甚兵衛の驚き、殆んど腰を抜かさん許りで、聲さへ泣き聲になり。

「ト、飛んでもねえことをおッ初めたッア、成る程、段々の事情を聞いて見れば、娘のした事は悪いことぢやアねえだ、意地と義理とでしたことだアが、あの身體を藝者なんかにしちやア、金田先生に對して濟まねえ、第一自分が藝妓になつて、俺を什麼しやうとするんだア？」

「オウ、老爺さん、忘れてゐた、ソ、その事も此の手紙に書いてある、明日より藝妓となるについては、今から家も疊むつもりである、而したら老父の身の上が心許

ないからは、此れだけは僕の處に引取つて世話をしてくれと、書いてあるのだ」
「ウン、然うか、そんなにしても、やつぱり家來筋の俺を、心にかけてくれるのか
ア、可愛さうだ、池田さん、ド、什麼にかならないものだらうかなア」
「さア、什麼にかしなればならないことは判り切つてゐるんです、それにしても
一應冬子さんに逢つて、話を聞く必要がある、兎も角老爺さん、一緒に出かけるこ
とにしませう」

「然うだなア、ぢやア兎に角行くことにしますべえ」
二人はやつと相談を決めて、すぐに二十騎町の宅へ急いだ。

(一) 三筋の糸 (其二)

「冬子さん、貴女のお志は、實に謝するに詞もありません、けれども、かゝる極

端の方法を取つて、却て僕に絶大の苦痛を與へて下すつたのはお怨みです、實に怨
めしいです」

正也は涙を垂れて、冬子に訴へるのであつた、甚兵衛も片手に涙を拂つて。

「こんな事をしてくれるなら、何故一言相談してくれねえだ、そりやア汝の心地は
よく判つてゐるだかなア……」

右と左とから掻き口説かれても冬子は案外平然として、其邊を取り片附けてゐた
手を止め。

「何もそんなに皆さんが悲觀することはないだらうと思ひますのよ、一生藝妓をす
る譯でもございませぬし、藝妓をしたからつて、必ず肉の犠牲になる譯でもなし、
たゞ一事の方便ではございませぬか、それにモウかうして了つたことですから、今
更仕方がございませぬわ、オホ、物は取りやう、氣の持ちやうでございます
よ」

「飛んでもない、金田先生の遺産に手を附けるさへ、僕は良心に咎めて出来なかつたものを、貴女の一身を犠牲にして、それで安閑としてゐることは出来ません、兎に角藝妓になるさいだけは破約にして下さい、他の分は暫らく拜借して置くとして、その金位如何でも致します、一體その藝妓屋は、ド、何處でございます新橋か、柳橋か、エ、冬子さん、何處でございます、仰有つて下さい」

「何處だつて可矣ぢやアございませんか、正也さん、貴下そんなお金の都合が附くのでございましたら、萬望それは他の用途にお使ひなすつて下さい」

「ソ、そんな馬鹿なことは出来ません、何處ですか、抱主の宿所を仰有つて下さい」

「池田さん、妾、それを貴下に申上げる必要はないのでございます、強つてお聞きなさると仰宥るから、それを申上げる前に、妾、一應自分の考へを曰つて見ます、元來今度の一件は、池田さん、妾、決して貴下のためにしたのではございませぬのよ」

「エーッ、僕の爲でない、では誰の爲にしたのでございます」

「オホッ、誰の爲つて、金田冬自身の爲にしたのでございます、緒方さんが、結婚を拒絶した腹癒に、こんなことをしたのでございますから、妾は妾の意地を徹して、腹癒の仕返しを横合から飛び出してしまふまでのごことで、たゞその仕返しが、貴下の問題にかゝつて居りますので、一應お答へを致したまでのごでございますですから執方にも關係のない妾一箇の了簡でございますから、池田さん、萬望お許しなすつて下さいませぬね」

冬子は態と冷淡な態度を示して、正也を此問題に近づけまいとする、彼の心の底には深い決心と、何か確たる覺悟があるらしい様子である。

正也は默然として腕を組んだまゝ心中の煩悶を覆ひ得ぬやうに眼を閉ぢたが、やがて打ち震ふ聲音に。

「ソ、それは理窟です、議論です、貴女と僕との間に、そんな四角張つたことはない筈ではございませんか」

「さア、それですから、貴女もそんなに義理堅いことを仰有らなくつても可矣でございますませう」

(三) 三筋の糸 (其三)

父金田五郎の氣性を受け継いだものと見へて、冬子は一旦自分の心にかうと決めた事は、誰が何んといつても決して翻へさなかつた。

今度の一條についても、堅く覺悟を決めただけ、且つ之が自分の池田に對する義務である、といふ觀念に支配されてゐるだけ、正也が辭を盡して説得しやうとして、断じて肯き入れなかつた、甚兵衛などの立場から考へたら、或は醉興とも思ふ

か知らぬが、冬子の胸中には牢乎として扱へべからざる決心があつて、自分の信ずる處を行つたのである。

到頭正也に行く先も告げず、時機が来れば必ず再會すると稱して、甚兵衛には別に因果を含めて得心させ、之を正也に話して、終に二十騎町の自宅を引き拂つた、正也は密かに人を出して、冬子の行く先を突き止めさせやうとしたけれども、冬子の方でそれと察して身を交したため、それも終に失敗に終つた。

冬子は元來三味線の嗜みが深かつた、それが一つは今度の動機を助けたものらしい、媚織は佳し、糸道も明いてゐる、柳橋一流の藝妓屋、花三升が大乗氣で抱へたのであつた。

翌くる日から彼は花三升の人となつた、一月ばかりは三味線のお淡ひや藝妓に必要な作法なぞを見習つて、四月三日の神武天皇祭、上野の山に彼岸櫻がチラホラと咲き初める頃、勝次と名乗つて披露目をなし、愈左襖を取る身になつた。

一種奇矯な、風變りの藝妓として勝次は賣り出したのであつた、奇を好むは人情の常、殊に此頃の花柳界はすべて珍らし物、變り種を喜ぶことごとて、勝次は間もなく蕩兒の間にその名を唄はれ、相當の流行兒になつた。
春も過ぎた夏の初め、冬子はまだ一度も敷居を跨いだことのない、薬研堀の彌生といふ一流の待合へ行つた、客は三二人連らしい、藝妓も三四人は來てゐる様子。

勝次は何氣なく、お座敷の敷居際に手を突いて挨拶をして中に這入ると、正面の床柱を背にし傲然と三三人の取り巻を眼下に見下し、麥酒の滿を引いてゐる二十九の紳士、不圖それを見ると、這はそも思ひがけない、その人は緒方時男であつた取巻の中には例の山田勇熊もある。

勝次は負ぬ氣の機先を制して、隔意のないふりを見せる。
『まア、緒方さんちやアございませんか、妙な處でお目にかゝりましたわね、這ん

な商賣をしてゐるのよ、萬望、チト御最負に……』
愛想よく曰つて、杯を所望した、緒方も意外な面地で、それでも場所柄と見たか之も隔意のない態を見せつゝ。

『ヤア、冬子さんか、強い變りやうだなア、何時からそんな商賣をしてゐるんかね』

山田までが口を出して。

『これは、阿蘇の美人、實にお珍らしいことで、アツハハツハツハ』

『アラ、嫌でございますよ、阿蘇の美人だなんて、そんなことは曰ひツこなしにしませうよ、如何もその節は失禮を、オホムム』

『イヤ、此方こそ失禮を……』

山田は頓狂な顔をして首をすくめる。

(四) 深夜の待合 (其一)

「さア冬子さんぢやアない、勝次君、もう皆歸したから大丈夫だよ、遠慮はない、夜を徹して語るも敢て辭する所にあらず矣だね、アツハムムムムム」

待合彌生で意外にも冬子の勝次に邂逅つた緒方時男は、何んと思つたか取巻連や藝妓を歸して席を改め、勝次と二人しめやかに、何事か物語るのであつた。

勝次も商賣柄、緒方には積もる怨みもあり、斯うして藝妓稼業をするやうになつたのも、彼の爲と思へば、無念押へ難き處なきにもあらねど、凝と堪へて何氣ない風を装つてゐた。

「何しろ阿蘇以來の舊知だ、中頃妙な羽目でお互に遺恨を懐くやうになり、喧嘩別れをして丁つたが、元々根も葉もないこと、舊怨を忘れて元の通りに仲よくなるうよ、然し冬子さん、アハムムム又しても冬子さんが口癖になつてね……如何だい、

金田先生の消息はその後見當でもついたかね」

「ハイ、有難うございます、如何も相變らず五里霧中で……」

「フム、それは困つたものだ、その事について、實は僕も少し聞き込んでゐることがあるんだがね……」

「エーッ、父の消息を何とかお聞きなすつて、何様なことでございます」

勝次は思はず膝を乗り出して、詞忙しく聞き返すのであつた、緒方は俄に話頭を轉じて。

「イヤ追々話すけれども、まづ聞きたいのは、君と池田君の關係だ、それから如何して藝妓になつたのか、身の上話も亦一興、サ、語つて聞かしやかね、アハムムム」

「嫌でございますよ、池田との關係だなんて、妾何も池田さんと關係なんかありやアしくつてよ」

「アハハハ、現在において交通はないらしいが、隠したつて知ってるよ、何しろ夫婦約束までした仲だからねえ、八百善の珍々鳴々なんかお安くなかつたでせう……」

「エーッ、八百善の……」

「ホーラ見給へ、金田先生が満洲に居つしやると云ふ話から、僕が池田に貸した金の話から、渡満の旅費問題から、いろいろ宜しくあつて、未来の妻ですもの、夫の危急を救ふのは當然です、なんて、お安くない白があつて、アハハハハ、チャンと聞いて知つてゐるんです、如何だ、鬮星だらう、モウ白状し玉へ、アハ、ハハ、ハハ、……」

「まア眞箇に驚いて了ひますわ」

勝次はかう言つて、何か切りに當時の記憶を呼び起す如く、やがてハタと小膝を打つて。

「判りました、あの晩、妾達は氣が付きませんでしたけれど、女中の話で、迂散臭い男が廊下に立つてゐたといひましたが、アツ、貴下でしたね」
勝次は腹の中で、緒方は何んといふ賤しむべき、而して卑しい男であらうと、胸は憤怒に燃えたが、素知らぬふりを装うてかう言つた。

「アハハハハ、冗談でせう、何んで僕がそんな劣等なことをするもんですか、然し兎に角聞いたものはあるのだ、僕は復聞きだがね、問ふに落ちず、語るに落ちた處を見ると、關係は事實だらう、所で、現在の状態如何、それが聞きたいものですねえ」

時男は意味ありげに突つ込んで行く。

(五) 深夜の待合 (其二)

「いゝえ、關係だなんて仰有られると、眞箇に迷惑ですわ、全くそんなことはありやアしないんですよ、少し位好意は有つてゐましたけれども……」

「アハハハハ、好意を有つてゐたは宜かつたね、としてですな、現在は……」

「全く今は如何してゐるんですか、それも知らないのよ、妾から貴下にお聞き申したい位だわ」

「左様ですか、現在はないでせう、ないやうに聞いてゐます、貴女を失つた池田は餘ほど失意らしい、僕もあの一以來件交際は絶つてゐますがね、聞く所に依ると、大に煩悶してゐるといふことですよ、辯護士もそれがためか、近來はあまり芳ばしくないさうで、高利貸の執行事件位が關の山でせう、アハハハハハ」

緒方は冬子が池田を捨て、失踪したものと、かねて解釋してゐるので、現在において全く關係はないと信じてゐた、それが寧彼をして勝次と親しく語り、且つ死灰再燃を灰かした動機であるらしい。

緒方の口から池田の現状を聞いた勝次の心は、今頗る波立つてゐるのである、自分が行く所も告げず、無理に振り切つて来たことが、それほどまでに正也を煩悶させたかと思ふと、居ても起つても堪まらないやうに思ふ、緒方の話には無論中傷の意味もあらう、誇張した所もあらうが、全然形のないこととも思へない、緒方の詞を押し返しても聞きたいのであるが、此場合これも出来ず、勝次は悶ゆる胸を抑へて知らぬ顔をしてゐたのであつた。

「如何だい、さう聞いたら、少しは心配だらう……」

「いゝえ、我れから交際を絶つた人のことでも、何ともありませんわ、オホ、……」

利かぬ氣の女だけに、巧に笑つて胡魔化したけれども、心の中は血を吐く思ひ。

「アハハハハ、如何自分の方から捨てた男にしても、それぢやアあんまり薄情だ

よ

『捨てるも捨てないも、関係のないことですよ。言つてゐるぢやアございませんか』

勝次は少しムツとして見せた、緒方は段々意が解けてくる様子で、詞の調子も親しくなると同時に、少しづつその形を崩して来る、勝次は早くもその様子を見て取つて、何か心に思案を定めたいらしい、今は互ひに胸に一物を懐いて、その心の奥を見破らうとしてゐる所に興味がある。

『いよ／＼勝次さんが池田に未練のない人だとすると、僕は改めて君の同情者ともなり、君の味方ともなつて、僕の知る金田先生の消息を語るがね、その前に尙考のため聞いて置きたいのは、例の二千圓問題だね、彼れは一體誰の手から出たんだ、而して君は如何して藝妓になつたんだ、僕は決して君に敵意を有つたり、金田先生の消息を餌にして、君に何か求めやうとするのではない、何しろあゝいふ行き

が／＼になつてゐるんだから、愈君の心に蟠りのないことを確めた上でなければ、實際語ることが出来ないからねえ』

緒方は言譯らしいことを云つて真面目に勝次を説いた、勝次は緒方がこんなことを餌にして自分を釣らうとするのではあるまいかと察しているけれども、父の消息といふ一事は嘘にもせよ、是非一應は聞いて見たい氣がする、それがために何事も辛棒して色に出さなかつたのである。

(六) 深夜の待合 (其三)

夜は更けて、先刻一時を打つた、然し此邊は表こそ看板も引け、待合の奥は是からがその本業である、店の方では何か賑やかに笑ひさいめいてゐるが、離れ座敷だけに緒方の室は寂としてしめやかであつた。

勝次は緒方の物語りが好い加減の出鱈目にしろ、兎に角父の消息とあるからは、聞き脱すことは出来ないと思つて、釣らるゝとは知りつゝも、彼に口を開かすまでは柔順にしよう、勉めて自分を殺してゐたのであつた。

「あのお金は全く池田さんが、何處かで都合したお金のよ、あの時は妾、貴下が癪に障つて、堪らなかつたものですから、池田さんに頼んで、池田さんは氣が弱いから、書生さんにもソツと持たせてやるつもりだつたのを、横合から出酒張つたんですよ、堪忍してください、今ちやあ何んとも思つてゐないんだわ、藝妓になつたのは氣まぐれもありますが、多くのお客様を相手にする商賣故、ひよつとした機會に、また父の便りでも聞くやうな手索りが附くかと思つて、時代めいた考へですが、全くですよ」

「然うですか、あまり信じられないけれども、マア信じて置ませう、アハ……」
「緒方さん、之れほど隔意なくお話をしたんですから、モウ焦らさないで、その父

の消息といふのを聞かして下さいな」

「然うですね、お話ししても可いやうですな」

「そんなに勿體を附けて焦らすもんぢやあないわ、何分弱い商賣でございますから……オホ……」

勝次は愛嬌を言つて、莞爾笑つたその姿がまたとなく美しい、緒方は蕩けるやうな目で、睨とその姿に見入つていたが、酔に紛らして、ツと右手を伸ばして、勝次の手を取らうとするのを、勝次は早くもその手を引いて。

「アラ、御冗談だわ、判つてよ、だからまあ話を先におしなさいつてば……」
勝次としては上出来の詞であつた、緒方はいよゝゝ悦に入つて。

「アハ……、チン……お預けか、何しろ昔は振られ男だからねえ」

「そんな未練たらしい嫌味をいふもんぢやあなくつてよ、昔は昔、今は今、心機一轉した冬子なんですよ、オホ……」

「アハハハ、冬子さんでも藝妓になると、こんなに外交術が巧になるんだね、驚いて了った」

「道中の長いのは禁物よ、世の中は大正四年だわ、早くお話しなさいな」

「イヤ無論話すとも、實はね、斯んなこと知つたらモツと注意して聞くんだつたけれど、一旦喧嘩別れをした中だから、深く注意しては聞かなかつたので、徹底しない所があるかも知れないけれども……かうつと、たしか君は加藤大佐とかいふ人から、お父さんが鐵嶺の先の方にあるといふことを聞いたらしいねえ、所がそのお父さんらしい人は、今は茫家屯北方高地にゐないんだよ」

「エーツ、それでは何處へ行つたんでございませう」

「さア、其奴が一寸今記憶してゐないんだが……然し委しいことが聞きたければ、此次にでも來た時に、チャンと調べて置いて詳細に話すことにする……」

緒方の話は飽くまでも氣を持たした謎のやうに聞かれる。

(七) 深夜の待合 (其四)

「然うだ、一通、順序を追つて言はう、斯うだよ、僕の銀行の株主で極惡意にしてゐる男が、鐵嶺で大きな雜貨店を開いてゐるんだ、その男の知つてゐるものが、今の金田先生らしい人に直接逢つた人間なので、その人から僕が聞いたんだ、何しろ滿洲の日本人間では、昨今非常な評判だといふから、餘ほど問題になつてゐるには違ひない、あまり問題になるので、その部落を去つて亦人に知れない所へ隠れこんだらしいよ、何んでも部下にも日本人らしいものが三四人はゐるといふことで、其大將の日本辯には確かに熊本説があるさうだ、然うく名前がね、鄭永龍とかいふんだが、本姓は確かに金氏だと言つてゐた、金氏と言へば、金田の金だからねえ、何か人相に特徴でもあつて、それを、その男が注意して見ていたら、すぐ判る筈

だ」

緒方の話は案外秩序が立っている、而して萬更嘘でもないらしい、勝次は半信半疑の中にも、熊本訛といふこと、金氏といふことが、太くその感情を動かしたのであつた。

「如何も思ひなしか、能く似ているやうに思はれますわ、それでその大將が隠れて了つた處は、何處なのでせう」

「さア、それが判らないのだ、何んでも見當はついていらつしやるらしいが」

「緒方さん、後生ですから、其の人に逢はして下さいな、妾、直接に聞きたいのよ」

「アハハハハハ、屹度然う来るだらうと思つていた、イヤ事と品に依つたら逢はせないこともないが……讀みと歌だ、池田に代うるに緒方を以てしては如何だ、此處が大事の處だ、冬子さんに求むる所があれば、僕も亦求むる所なくして可ならんや」

だ、といふと卑劣に聞えるが、實は多年の戀人だからね、かういふ機會を利用して……アハハ……」

果して緒方は之れを餌に、冬子を弄ばうとする本音を吹いた、冬子もそれは豫め期していた所である。

「緒方さん、妾、藪妓をしていたつて處女ですよ、貴下のやうな誠實のない、女を翻弄にする浮氣心では何んと仰有つても嫌ですわ」

「イヤ、そんなことは斷じてない、這んなことを言ふのは全くテレ隠しなんだ、心から誠を捧げます」

「オホハハハ、如何口でばかり誠を捧げると言つても、その實が見えない中は嫌ですわ」

「ぢやあ實を示せといふんですね、よろしい、深草の少將百夜通ひも辭しません、愛する冬子さんのためなら靴も紐も結びます」

「そんな形式的なことなんか如何でもよござんすわ、モット精神的、獻身的ことをして下さい」

「實に難かしいですなア、ぢやあごんな事をすれば可んです」

「何んなことつて、それを妻から指示する限りではないわね」

「成程、よく判りました、ぢやア今夜は一まづ之で打ち切りますかな」

「然うしませう、妾も、次の機会を樂みに待つています」

(八) 失望の蘇生 (其一)

池田正也は法律家には似合はぬ感情の人であつた、彼が法律を選んだのは、決して適材適所でなかつた、殊に辯護士などは最も不向であつた、小心で感情家で、頗る物を氣にする男であつた、彼が法律を選んだのは、父が代言人であつたといふ習

慣に囚はれた結果に外ならぬ。

金田冬子を得る前に彼は、それでも胸に感情を刺戟すべきことがなかつたので、

其業にいそしんで、商賣も若手では可なり繁昌し、方で、また評判も相當にあつた

殊に刑事辯護の感情論が妙に法廷を動かしたもので、是から賣り出さうといふ處で

冬子との關係や、金田先生問題の屈托や、緒方との確執やらで、自然八方に氣を配

り、いろいろの煩悶に捉はれたため頓挫したのであつた。

殊に冬子を失つた後の彼の精神状態は全く藻抜の殻の如く、絶えず冬子に對して

濟まない、氣の毒であるといふやうな、感情に支配され、這んな結果になるならば

縦へ職業を失ひ、家を失つても、冬子を手離すのではなかつたと思ふのであ

る。

待合彌生で、緒方が勝次に物語つた池田の現状は、全く事實であつた、冬子を失

つた後の正也は、失望のドン底に沈んで、法廷へ出てと思ひある身には辯論にも更

に力がなく、今までとは打つて變つた姿になつた、自然評判も悪くなり、發展する道も断えて、門前は雀羅を張るの有様である、正也自身も半ば自暴自棄の人となつた、男らしくもない、意氣地なき奴といふものがあるが、感情家たる正也としては無理もない。

事件は少く、従つて用事もないたため、たゞなすこともなく、此頃では讀書に耽つていた、夕方五時頃、書生が一通の郵書を正也の書齋に持つて來た、封を切つて見ると、それは正しく冬子から……

正也は俄に生氣づいて、一生懸命にそれを讀み下した、すると次のやうな文句が認めてある。

御心に背き、心強く振り切つてお別れ致せし以來、雨につけ風につけ片時も御左右をお案じ申上げぬ日とは無之(中略)最早拜顔の時機に達し候まゝ一度お目もじの上、積る物語海山致したく、父の消息についても聞き込

み候事之有、今宵にも一應お入らせの程待上申參らせ候、妾の妓籍は柳橋花三升にて勝次と申し候若しわせらるゝならば代地の豊田家と申す待合ま

で委細お目もじの上あらゝかしこ
月 日 日 月

と、あつた、正也はそれを讀み終ると、ツと立ち上がつて時計を見た、五時が二分ほど過ぎて日はまだ暮れては居らぬが片時も待つに堪へないやうに、すぐに仕度をして、洋杖片手に欣然として我家を出たのであつた。

書生や車夫は何時にない主人の元氣らしい様子を見て、事の次第を訝りながらも密に喜びを分つたのは頼母しい。

正也は多分、冬子は遠い地方へでも行つたことだとはかり想像していた、同じ東京の柳橋に冬子がいるやうとは思はなかつた、燈臺下暗しの譬も這んなことかど、一人微笑みながら、電車で代地に行つて豊田家といふ待合に上つた。

正也は謹厳な男であつたから、宴會なぞの外は、あまり待合なぞの敷居を跨いだことは無い、従つてよく勝手も知らぬほどであつた。

(九) 失望の蘇生 (其二)

「まあ正也さん、何からお話しを致して宜しいやら、それでも御無事で、大層お瘦遊ばしたと……」

冬子の勝次は、人目なき離れ座敷に、その戀人と相逢つて、モウ嗜みも何もあらばこそ、犇と正也の膝に縋りついて他愛もなく、心ゆくまで堪へくた情緒を語るのであつた。

思ひは同じ正也も、殆んど夢見る如き心地で、暫くは二人とも燃ゆる胸の思ひを互に心と心に移すのであつた。

「僕はよもや冬子さんが、此東京にいやうとは思つていなかったのです、定めし何處か、人知れぬ田舎にでも行つて居ることだらうと思つて……此の数ヶ月間の僕は殆んど失望と煩悶とで、自暴自棄に比しい生活をしていたんです、エえ、職業などは久しい間なるまゝに任して、事件の頼人もなければ、いつて來るものもありません、門前は雀羅を張るといふ姿……」

「あの、眞箇に濟みませんでしたわねえ、あんなことをして、それがために貴下をそんなに苦しめたかと思ふ、妾、申譯がございませんわ、決してそんなつもりでしたのではございませんから、萬望お許し遊ばして下さいませね」

「いゝえ、飛んでもない、貴女に罪はないのです、要するに僕が意氣地なし、あまり弱いからです……然しそれも今となつてはモウ過去のこと、斯うしてお目にかゝれば、すべて一掃されて了ひました、それよりか冬子さん、第一にお話致さなければならぬのは、金田先生のその後の消息ですが……」

「エえ、妾も實はそれについて、是非御相談を致したいので、こんなことを申上げると、口實だと仰有るかも知れませんが、妾、實は藝妓になつた一つの目的は、かういふ多くの人に接する商賣でございますから、ヒヨツとすると、父の噂でも聞き込むやうな事がありはすまいかと、そんなことを考へたものでございますから、二夕道かけて此社會に足を入れたのでございます、その目的が如何やら功を奏しさうな様子でございますの……」

「ア、然うでしたか、何れその位の深い考へはあつたことだらうと、僕も想像はしていたのです、而してその功を奏しさうだと仰有るのは、如何なことなんです」

「あの、正也さん、妾、實はねえ、此間緒方に會つたのですよ」

「ナニ、緒方に會つた？、ウム、ソ、そしてド、何處で」

「薬研堀の待合彌生と申す處で……」

冬子の勝次は此間の夜の模様を、落もなく正也に物語れた後。

「男といふものは、眞箇に他愛もないものでございますね、妾が、如何に何んぼ何んでも、緒方さんに靡くか靡かないか、常識で判断しても分りさうなものですのに、彼れほど怨みを懐く仲になつてゐながら、やつぱり弄ばうとしてゐるのでございませよ、而して政畧でお座なりのことを言つてゐるのを、眞に受けてゐるのでございませよ……」

「イヤ彼の男は誰でも見縊るのですから、やはり冬子さんが、心から藝妓になつてゐるものと思つて、見縊つてゐるのでせうよ」

(十) 失望の蘇生 (其三)

冬子の勝次は尙も詞を續けて、緒方が、自分の一身と正也との現今を確めた後、固にしてゐた父の消息を語つた次第を物語り。

「初めは半信半疑でゐたのでございますが、段々立入つて聞くと、萬更出鱈目でもなさうなのです、それにその大將が、金氏といふのが本姓だといふことや、熊本辯だといふことや、皆、今まで聞いてゐることより一步を進めたもので、たゞ隠れた先が何處だか分らないのが残念でございますのよ」

「イヤ、それは恐らく事實でせう、その話には少しも偽はりがありません、緒方は満洲には多くの知人を有つて居るので、あの東洋銀行といふのが、殖民地商人の金融機關で、株主も多くそれ等の人で固めて居るので、それですから、最初僕も大いに緒方を力にして居たのですが、あんなことになつて了つて、彼の手から何んか材料も得ることが出来なかつたのです」

「然うでございますか、では緒方さんの話でも信用されるのでございますわね」

「それだけは信用しても差支ないでせう、それに僕がその後、加藤大佐や、その他の方面の人から聞き得た所も、それほど詳しくはありませんが、略一致するのです」

アノ八百善でお話した時の問合せは、疑問の隊長に會つたといふ商人が、モウ鐵嶺を去つたので、要領を得ませんでした、范家屯北方高地を去つたといふことは聞きました、それから部下に日本人らしいものがあることも聞いています」

「然うでしたか、ちやあ大變有望でございますね、如何でせう、之は父でございますか」

「僕はモウ八分通り然うだと信じます」

「妾も氣の爲いか、然う思はれてならないのです、所がね正也さん、明日か明後日の晩は、緒方が、その雜貨店の主人に會はしてやると言つて居るのですよ、眞箇に會はせてくれますと、愈といふ所が分るんですが……、でも考へると慄としますのよ、その人に會はしてくれたら、後が大變なんです、つまりそれと交換的に妾を弄ばうと居るんですもの」

「フム、實に彼は陋劣極まる奴ですな、如何してそんな猶太のやうな根性になつた

のだらう、昔は莫逆の友であつたが、見下げ果た奴だ』

「所がね正也さん、當節は然ういふ圖々しい、厚釜しい人が成功して、正直な誠忠を守る人が失敗する世の中になつて了つたのです、エえ、左う／＼まだ忘れていたが、卑しいと言へば、こんなことがあるんでございますよ、あの、何時か八百膳に御同行したことがございましたわね、あの時女中が廊下に變な男が立つていと申してましたらう、彼れが如何も緒方らしいのです、緒方でなくとも、その一味の奴に相違ないんです』

冬子は緒方が彌生で圖星を指した概略を物語り。

「すつかり立聞きをして、それから證據を抑へて置いて、あの復讐に出たらしいのでございます』

「フム、左うでしたか、實に油断のならない奴だ』

池田も之には少からず驚くと共に、緒方の情疑深いのに呆れ返つて了つた。

(十一) 失望の蘇生 (其四)

「然し正也さん、妾、決して緒方から受けた侮辱と、怨みとは忘れませんから、屹度復讐してやりますのよ』

冬子は思ひ入つたやうに詞に力を籠めていふ、正也は例の小心な神経質から、不安に堪へないやうな眼で氣遣はしげに冬子を打ち成り。

「冬子さん、貴女そんなことを仰有つて、千金の身體ですから、若しものことがあつては一大事です、それに今の場合は、お父様の消息を聞くといふ大事の任務があるのですから、隠忍自重して、成るだけ柔順に、柳に風と受け流して、當らず觸らずにするやうな方針を取つて下さい』

「え、無論さう致しますとも、ですけれども愈その商人に會はせて話をさせた

となれば、必ず難題を持ちかけるに違ひないので、その時には屹度復讐してやり
ますつもりよ』

『いえ、それが好くありません、其處を何とか穏やかに切り抜けてね、又以前の結婚
拒絶のやうなことがありますと、つまり損ですからなあ』

『それも左うでございませぬね、あの時でも、八百藩の時でも、今度のことでも皆
な妾が出過ぎたんですからね、オホー』

冬子は他愛もなく笑つた、二人の話はそんなことで終つたが、しかし却々名残り
は盡きない、正也は思ひ出したやうに。

『それで、愈々其無名の豪傑が突き止められたとなつた曉に、若し金田先生とい
ふ見込が充分になれば、今度こそ満洲へ渡らなければなりません、その時には僕に
も相當の成算がありますから、此商賣を罷めて、昔の冬子さんに歸つて下さい、僕
は貴女が何時までもかういふことをしていられるのを、今後において尙數々見なけ

ればならぬといふのは至大の苦痛です』

『眞箇に濟みません、萬望許して下さい、妾、こんな處へ足を入れてはいますが、節
操だけは……』

『勿論です、そんなことを疑ふ餘地はないのです』

『でも、妾、本来ならば、恚うなるにしても、貴下のお許しを受けるのが至當だつ
たのです、一旦貴下に許した一身、自分の自由にする権利はないのですもの、正也
さん、貴下のお必に背いて這んなことをした冬子でも、やはり妻にして下さいませ
わねえ』

冬子は初心らしく、顔を眞赤にして羞みながら、這んなことをいふ、冬子のやう
な勝氣な女でも、戀人の前には極めて怯懦である。

正也はまたそれを云はれることを苦痛に感ずる如く。

『フ、冬子さん、そんな事はモウ云はずに置いて下さい、貴方は誰のために犠牲に

なつたのです、池田正也の弱い心は、曳に弱められます、喉血の盟ひは、また新しく此胸に響いています、二人の赤い血汐は身内に混和して流れているのです、冬子さん、モウ、僕は再び貴女を夫ひませんぞ……」

正也は面に朱を漲らして、興奮したやうにいふ、冬子も嬉しさに情激して、我にもあらで正也の膝に泣き倒れた。

二人は今甘き歡樂の巷に夢見る如く、恍惚として逍遙うて居るのであつた。

(十一) 苦肉の復讐 (其一)

薬研堀の待合彌生の例の離座敷に、宵からしめやかに語る二人の客、一人はいふまでもない、東洋銀行の緒方法學士、一人はその連で四十五六の眼の鋭い男であつた。

席に待るのは花三升の勝次で、外には誰もゐなかつた。

「浅野君！、此女がかねてお話を置いて置いた熊本の名士、金田先生の遺兒で冬子さん、世を忍ぶ假りの名は、柳橋藝者花三升家の勝次さんと仰有る……」

緒方は笑ひながら、勝次を浅野といふ男に紹介す、浅野と呼ばれた男は、その険しい眼を働かして、柄にもなくニヤ／＼と笑ひ。

「然うかね、汝さんが金田のお嬢さんかい、僕は東洋銀行の株主で鐵嶺淺野洋行の店主だよ」

「まあ然うでございましたか、始終緒方さんからお噂を承はつて、是非お目にかゝりたいと、それは／＼眞箇に見ぬ戀に憶れてゐたんでございますよ、宜うこそお在下さいましたわね」

「アハハハハ、見ぬ戀は振るつてゐるね、さア、勝次クン、約束通り淺野君を連れて来たから、例の一件を直接に思ふ存分聞き給へ」

緒方は勝次の色に釣られて、到頭浅野を引ッ張り出して来たのであつた、勝次は今宵こそ此生きた一種の證人に向つて、いろ／＼の疑問を解決して、父五郎の消息を確かめやうと思ふものから、俄に眞面目になつていろ／＼胸中に質問の事項を洩らすまいと注意するのであつた。

「誠に不躰でございませうが、かねて緒方さんからもお話がございました満洲の馬賊の隊長に、日本人らしいといふ人ね、その人の事について少し心當りがございませうか……」

「ウム、緒方君からも聞いてゐるが、什麼やら汝さんの親父らしいといふことだね満洲殊に鐵嶺附近では誰でも知つてゐる評判の話だよ、僕なんかまア一番詳しい事を知つてる方だ、その男は年頃五十八九か、まア六十までの老人だよ、馬鹿に元氣の可矣、關羽式の髭を耳の下から生やして、色の黒い、生へ際の抜け上つた見るから豪傑らしい顔だね」と

「色が黒くつて、生へ際が抜け上つて……何か特徴についてお聞きに及びはございませんか」

「さア其處まで委しくは聞かんかね、然う／＼名前が聞きたいとか言つてるつていふから、いふが、姓名は鄭永龍ツてね、和藤内見たやうな名だ、けれどもそれは本名ぢやアない、本名はチンスーサンと言ふんだとさ」

「エーッ、チンスーサン？、チンスーサンとは支那語の發音でございませうか」

「ウン、然うだよ」

「浅野君、漢字で如何書くかね」

緒方は盃の手を止めて横合から親切らしく口を入れた。

「さア、如何書くか知らないが、滿洲では金大人で通つてゐるんだ、チンは金だね、スーサンとは如何書くだらう、スー、スー、さうだね、蘇ぢやアないかしら、サンは山に決つてゐる、多分さうだらうと思ふ、金蘇山と書くだらう」

「エーツ……金、蘇、山アノ、金蘇山でございませうか」
勝次は思はず膝を乗出して息を吻ませた。

(十三) 苦肉の待讐 (其二)

久しく疑問であつた、冬子と池田とが苦心焦慮して探ねつゝあつた無名の豪傑、満洲の山奥に日本部落を形作る日本人らしい長老、金田五郎らしい豪傑、その人の名は、今淺野宗二郎の口から説明された、支那語のチンスーサン、即ち金蘇山といふのが彼の姓名であつた、無名の豪傑は金蘇山氏であつた、冬子が驚喜して息を吻ませたのも決して無理ではない、金蘇山とは正也の父芳則の手記した日記に記されてあつた金田五郎の變名ではないか……
驚いたのは獨冬子ばかりではない、不注意である緒方時男も亦之れには一驚を吃した。

した。

「ナニ、漢字で書くど金蘇山、ハテな、金は金田の金、蘇山は先生の號だ、阿蘇山に囚んだ號であつた、ウム、ど？、もう疑ふ餘地はない、勝次クン、イヤ金田冬子さん、間違ひはありません、その人は確に貴女のお父さんだ、年頃も匹敵するし、熊本訛のある所といひ間違ひはない、間違ひはない……」

緒方は得意満面の體で、冬子の態度に注意した、冬子も無論金蘇山の名に依つて緒方と同じ推理を下して来る、イヤ推理などといふより直覺で然う感じた、嬉しさ喜ばしさ、恐いやうな、嬉しいやうな、胸には千波萬波、濤の如くに躍つてゐる。

「フ、さうでございませう、蘇山は父の號、金は姓、ワ、妾も父らしいと思ひませう、淺野さん、あ、有難うございませう」
勝次は心からの喜びを以て、淺野に感謝した、淺野は別に何とも感じないらしい

様子。

「アハムムム……大層嬉さうだが、金蘇山といふと、汝さんのお父さんの名なんだね」

「アムさうでございます、父の日本名に相當するのでございます、父は金田五郎と申して、號を蘇山といひ詩を讀みました」

「ナム成程、それではもう間違ひはなさうだな」

「それで淺野さん、その金蘇山は一體今何處にゐるのでございませう」

「鐵嶺の東北四十里、范家屯北方の山中にゐたんだがね、あんまり日本人の評判になつたので、何處かへ逃げ込んで了つたのだ、逃げ込んだ先は分らないが、多分その西方高地、范家屯といふ部落から八里ばかりある山の中だらうといふことだ、確に見て來たものがある、まアその邊へ行けば分るさ」

「如何だい、冬子さん、スツカリ分つちやつたね、嬉しいかい、フム、嬉しからう

となると、愈滿洲へ乗出す段取だね、アハムムム、君が愉快らしくすると、僕も大に満足だ」

緒方は矢鱈にハシヤいで、意氣揚々と意味あり氣なことをいふ、竊に求むる所があるのは曰ふまでもない。

淺野は尙冬子の根問ひ葉問ひに對して見かけたよりは親切に、いろいろなことを説明して聞かした、冬子はそれ以外に、有力な材料を多く聞き得たのである。

話も済むと淺野はアツサリ切り上げて先へ歸つて了つた、粹を利かしたらしい、彌生の離座敷には、緒方と勝次とたゞ二人である、勝次は針の筵に座する思ひであつた。

(十四) 苦肉の待讐 (其三)

浅野が歸つた後は、緒方と勝次と唯二人である、勝次は緒方が必ず何か猥りかましいことをいひ出すに違ひないと、豫め警戒してゐるので、よい潮先を見て逃げやうとするけれども、緒方は却々落ち着き拂つて容易に座を立たうともしない。

勝次とて、浅野の話を聞いたからもう用はないと、まさかに態度を一變する譯にも行かず、故に愛嬌を振り蒔いて。

「緒方さん、有難うございました、妾眞箇に心から底から、今度ばかりは厚く御禮を申しますわ」

と、左も嬉しさうに、艶姿をして見せる、緒方は情に堪へぬやうな目で、恍乎とその美しい姿に見入り。

「イヤア、そんなに曰れると、僕ア何だか聲がこそばゆくなるよ、然し今の浅野の話によると、モウ間違ひはないね、確にさうだ、さてさうだとして、愈満洲に渡り、金蘇山先生を尋ねて父子の名乗合をするまでの道中が大變だ、第一が費用問題を

第二が確乎した保護者、第三が君の進退問題、却々之からが難關だが、さて冬子さん、それを君は如何するつもりかね……」

緒方は先づ同情したやうに、眞面目で冬子の方針を聞いた、冬子は意外にも緒方が眞面目な問ひを起したので、一寸その心の底を斗りかね、暫し思案する様子であつたが。

「さア、何分咄嗟のことでございますから、今と申しても纏まつた考へも出て参りません、何れよく思案も致して、何とかしなければなりませんまい」

「然うですが、僕も今では心から君に同情してゐるんですから、その事については充分努力もしますし、また相談相手にもなりますよ」

「段々と厚い思召、眞箇に嬉しく思ひます、何れ篤と勘考しました上で、是非御世話に預かりたいと存じて居ります」

「アハハハ、さうですか、然し別に勘考するほど複雑した問題ぢやアありません

此處で解決のつくことです、要するに金力と人を得れば可いのでせう」

緒方は意味あり氣に段々膝を押し進めて詰め寄るやうに斯う言つた、冬子は緒方の親切らしい詞が却て薄氣味悪く感じるのである。

「そりやアモウ煎じ詰めるとそれだけのことですが、さてそのお金、その保護して頂く人を得る事が、却々容易ならぬことでございますわ」

「アハ……、そんなことは何でもない、同情者の緒方に附いてゐるぢやアありませんか冬子さんの一言で、僕は此事件の犠牲者になることを辭しませんよ、費用も支出しませうし、無人境を行くが如き滿洲の山野も貴女の手を携へて同行します、今の一身も所置しますが如何です」

緒方の親切らしかつた詞は、此處に到着しやうための方便であつた、勝次も初めてその眞意を悟つたが、態ど恍けた顔で。

「そんなにまで、仰有つて下さるお志、有難くお受け致しますが、妻の一言と仰

有る……」

「ハツハツハ、冬子さんも随分虚けますねえ、知れたことぢやアありませんか」
緒方は是處ぞと、しなだれかゝつて、冬子の手を取らうとした。

(十五) 苦肉の復讐 (其四)

「アレー何を遊ばすのでございます……」

冬子はツと身を引いて、逃げやうとするその着物の裳を、緒方は確乎と押さへて離さず、少し氣色ばんで。

「冬子さん、ド、何處へ行く？ 汝、今更何處へ逃げるのだ、此間の晩、君は何んど曰つた、イヤサ、僕が淺野を此處まで連れ出して来たのは何んの爲だ、勝次さん、私は過日の約束を忘れたのか、今宵は君が僕に許す時ではないのですか、君は何と

言つた、誠實が見えたら、思召に従ひませうと言つたらう、それを冗談とは言はせないぞ、身受もしやう、渡満の費用も支出しやう、満洲の山野も共に跋涉しやうとまでいふ、精神から言つても、金銭問題から言つても、満腔の赤誠を披いた眞實ではありませんか、何處に這んな醉興なことをするものがありますか、何も天下に女が一人といふ譯ではなし、それをしやうといふのは、畢竟昔からの關係もあるからです、それを振りもぎらうとするのは、勝次さん、君は僕を賣るつもりなのか」

緒方の劍幕は一通でなかつた、怒氣は心中に溢れてゐるが、努めて平靜を装つてゐるだけ、それだけの憤怒は眞面目で、且甚だしいことが判る。

流石の冬子も此手詰の談判には、全くタヂ／＼の体であつた、緒方のいふことは理屈とすれば、全くそれに違ひない、この危急を脱れるには、如何しても穩に宥めるより外に道がないと思つて、詞を優しく。

「緒方さん、兎に角其處をお離しなすつて下さい、よくお話しを致しますから、ねえ」

と、その顔を覗き込むやうにして見た、緒方もそれに我を折つて、少しは怒りを鎮めたが、捉へた勝次の裾を放して、自分の座に着いたが、その眼は油断なく勝次の舉動に注がれてゐる。

「貴郎の仰有ることは一々御有理でございますが、然し緒方さん、妾、決して貴下を賣るのでも何んでもございませぬ、御考へなすつて下さい、藝妓をしてゐても金田五郎の娘でございますから、愈父の在所が分つたとある以上、父に對面して、その上で改めて許しを得て、正當に夫を定めたい……自分勝手にすることは父の名に對しても出来ないのでございます、それまでは是非處女でゐたい希望です、其處を何うかお察しなすつて頂きたいので……」

方便ではあるが、シンミリとして斯う云つた、緒方はすぐその詞尻を捉へて。

「成程、それは道理です、では聞くが、そのお父さんの前で此人を夫としますから……といふ、その將來の夫に、僕を指定することは無論差支ないでせう、イヤそれが確保されるれば、僕も男だ、清い身體で、處女として貴女と一緒に、お父様を尋ねて満洲へ行きませう、さア、その返答は如何です、それほどに仰在るなら、之に對して異議は言へますまい、冬子さん、その確答を聞きませう……」

緒方は勢ひ込んで詰め寄せる、眞劍の態度で、且つ手詰の談判である。

冬子の勝次もかほどの難關に陥らうとは豫期してゐなかつた、全く返答に當惑して了つて俯首れたまゝ沈黙つてゐる。

緒方は焦れに焦れて、詞も荒く。

「さア、その返事は如何です、その返答が出来ない筈はない」と、捨鉢氣味に投げやるやうに言つた。

(十六) 苦肉の復讐 (其四)

「それでも、さてとなりまますと、熟考して見なければなりませんので、今即答する譯には參らないのでございます」

「ナニ即答が出来ないと、そんな筈はない、初めから出来る筈だ、ちやア嘘を吐いたんだな」

「イエ決して、然ういふ譯ではないので、此間の事は、藝妓の勝次が座興に申し上げたのですから……今は娘の冬子が申す詞でございます、其處をお聞分け遊ばしてねえ、お願でございますから……」

「アハハハ、そんな巧い事づくめで、胡麻化したつて駄目だ、まア少し語りませう」

何んと思つたか、緒方は氣を敗り直して詞を優しく、杯を取つてグツと飲み干し、それを勝次に酌した。

「妾は、お酒は一滴も飲めないのよ」

「そんな愛想のないことをいふものぢやアない、一杯お飲みなさい」

「ぢやア一つだけね」

勝次は快くそれを受けて飲み干し緒方に返した、緒方はつゞけざまに三四杯飲んで元氣を附け。

「如何だい冬子さん、そんな堅いことを言はずに妥協しやうぢやアないか、色や戀で理屈を言つたつて仕様がないや、ねえ、アツハハツハツハ」

緒方は、搦手から碎けて出た、勝次は此の邊で、甘く切り上げて逃げ出さうと思ひ。

「然うですわね、妾もモウ一度よく考へて見ますことよ、此次にお目にかゝつた時

は屹度確答致しますわ、今夜はお歸り遊ばせ、御一緒にブラ／＼参りませう」

勝次は立ち上つて、緒方の心を緩和すべく、優しく其手を取つて引き立てやうとした、その不意を狙つて緒方は是處をどばかり、力を込めて勝次を抱きすくめた、而して胸のあたりにその手を觸れやうとした、勝次は驚き呆れて。

「何をなさるのです、そんな、亂暴なことを、處女の肌を……」

と、一生懸命に振りもぎらうと焦るけれども、緒方は金剛力に抱きすくめて。

「其手は喰はん、かうなれば騎虎の勢ひだ、邪も非もない……」

亂暴千萬にも其場に捻じ伏せて、既に怪しかる所業に及ぼうとする、冬子も今までは、正也に誠められてゐた口上があるので、隱忍に隱忍を重ね、大抵のことは忍んでゐたが、斯うなつては一大事、藝妓といふ弱味のある商賈、聲を立てることは知つてゐるが、それも端たないので、力を極めて抵抗し、辛うじてその毒手を脱れ慌たしく離れ座敷の廊下傳ひに、店の方へ逃げて行かうとするのを、緒方は阿修

五八
羅の如く追ひ縋つて、グイと袖を捕へて引き戻した、引く力と逃げる力で袖はビリ
くと綻びる。

勝次はモウ我慢が仕切れなくなつた、かうなると彼は頗る強い性質を有つてゐる
憤怒の形相物凄く、強ひて逃げやうともせず、引かるゝまゝに引かれ来て、窮鼠却
つて猫を噛む反噬の勢強く、力を極めてその腕で緒方の胸のあたりをドーンと突
いた、不意を打たれて、緒方はハッとその手を放した。

「卑怯もの、ナ、何をするので、誰が汝さん見たやうな奴に、此清浄な體を許す
ものか、什麼するといふのです」

(十七) 苦肉の待讐 (其六)

「如何もしない、約束の履行を迫るのだ、モウ理屈も何もない、さア勝次、素直に

いふことを聞け」

「縦へ女でも……藝妓をしても、金田五郎の娘です、貴下のやうな卑劣極まる、戀
の叶はぬ意趣晴らしに厚意で貸した金を、楯にしてよくもよくも池田さんを苦しめ
たな、そんな奴に此身が任せるか、金田冬子は池田正也の未來の妻です、主ある身
に手でも觸れて御覽なさい、許しは致しませんぞ」

勝次は憤怒のあまり、這んな捨白で、高飛車に緒方を押し付けた、緒方は屹とな
つて齒齧みをなし。

「ナ、ナニイ、池田の妻だと、じやア初めから俺を騙つたのだな……」

「知れたことで、さア貴方が池田正也と金田冬子に加へた侮辱、迫害が忘れて了ふ
ほど、勝次は健忘性ではないんです、藝妓するのも、謂はゞ汝さんの迫害からだ、
靡くど見せて聞くことだけ聞いて了へば、もう汝さんなんか用はない、今こそ金
田冬子の苦肉の復讐、判りましたか」

冬子は顔蒼白にして、眼を釣り上げ、唇を紫色にして、身を慄はしつゝ、怒りに任せて大膽な放言をした。

緒方はさてこそ騙られたかと、口惜しさに満面朱を濺ぎ。

「フ、不埒な女だ、諾し、然ういふ了簡なら、此方にも考へがあるぞ、己奴……」腕を厄してヨロ／＼と立ち上り、鐵と固めた拳を揮つて、勝次の頭上に加へやうとする、勝次は素早く其下を潜つて、トンと緒方の弱腰を突いた、空を打つた上に機會を食つた緒方は、前のめりにのめつて其處に倒れた、と、同時に、太く頭を其處にあつたチャブ臺の角に打ち付けて、小鬘に傷がつけた、ハツと面を上げて、思はず傷口に手をやると、血汐がサツと迸しつて、右の掌は朱に染つてゐた。

「己奴、如何してくれるか……」

と立上つて、四邊を見た時には、勝次は飛鳥の如く身を交して、店を飛出さうとして、女將に支へられ、争つてゐる時であつた。

「放して下さい、女將さん、こんな處には一刻もゐられません」

「まア、兎に角一遍お座敷へ歸つて下さい、その上で歸るなら歸るで可矣から」

「嫌です、後で苦情があれば、花三升へ来て下されば判るんです」

勝次は勢銃く、女將を振り放して、彌生を飛び出した、女將のお倉は呆氣に取られて、大急ぎで離座敷へ飛んで行く、緒方は小鬘に傷を受けて無念の齒齧みをしてゐる所であつた、お倉は袂から半巾を出して傷口を拭ひ、驚いた體で。

「旦那！、ド、什麼したんでございます、勝次さんは止めるのも聞かず、逃げて行くし、貴下は傷まで拵へて……」

緒方も女將が来ては流石に氣まり悪くやありけん、氣を取り直して。

「ナ、ナニ心配することは無い、オ、俺が悪かつたんだ」

「だつてお客様に怪我までさせて」

「可いよ、可いつて事さ、荒立てるは不可ん、ナアニ傷は大したことはない、さア

飲み直した、別嬪を四五人呼んで来い」
と、その場のテレ隠しに擬勢を張つた。

(十八) 無實の浮説 (其二)

待合彌生の活劇は實にかうした結果に了つた、緒方も無論豫期しなかつたことで、冬子の勝次はより一層思ひがけないことであつた。
緒方は之を荒立てると自分の非を曝らさなければならぬので、其場は何氣なく濟ましたものゝ、考へて見ると痛憤骨に徹して忘れることが出来ない、散々騙された上に、敵に多大の糧を與へ、その上あんな大汚辱を蒙つたのである、彼の胸中には復讐の念が火の如く燃えてゐる。
彼の事あつて後數日、緒方は自宅の一室で例の參謀とも副官とも見ゆる山田勇熊

を呼び入れ、何か密議を疑らすのであつた。
「什麼も實に呆れた屈辱でございますな、酔つて轉んだと仰有つたけれども、自態その小賢の傷は曲者だと、私も睨んでゐたのです、御有理です、此奴ア一つ手酷い復讐をしてやらなければ蟲が癒ませんな」
「さア、それで汝に相談するのだ、何しろ淺野を紹介してやつて、少なからぬ運動費を入れて、モウ是れで可いといふ處で、這んな慘目な背負投を喰つたのだからなア」
「それで、復讐の御腹案はあるのでございますか……」
「ある？、あるとも、大々的計畫があるんだ、それはなア、彼奴の方に取られた子タを利用して、池田と冬子を迫害してやるんだ」
「なるほど、としますと、何んな事で、その子タといふのは滿洲の豪傑ですが、アノ阿蘇美人の阿父を玉にするんですか」

「まあ然うだ、つまり満洲にゐる金蘇山といふものは、是れかくくの素性で、その子の冬子は藝妓に身を窶し、辯護士の池田正也と三人氣脈を通じて、悪事を企てゝいるといふやうなことにするんだ」

「ただ悪事を企てゝいるでは困りますなア、モウ少しそれが具體的によりませんと仕事になりません」

「勿論さ、其處で淺野を抱き込んで、幸彼奴が歸朝つてゐるから、彼奴に噂を生せるんだ、噂といふのはな、金蘇山が満洲で金鑛を發見したといふ觸れ込みで、資本主を探してゐるが、それは詐欺の手段だといふやうなことにするか、それが不味ければ、池田と冬子と結託して、父でもない金蘇山を父と稱し、之を利用して満洲に渡航し何か企てるのか、其處には相當の工夫があらうじやアないか、何れ彼奴等二人は、アノ豪傑が金蘇山と判つた以上は、東京に沈としてゐる氣遣ひはない、必ず渡滿の準備に逸るに決つてゐる、其妨害をしてやるんだ、何をするにしても先立つ

ものは金だ、今の二人の現狀では金の工夫を自分達にされる氣遣ひはない、必ず人の力を借らなければならん、其處につけ込んで風説を立てるんだ、屹度成功するぞ其の風説の工夫を、汝にして貰ひたいんだ」

「私にですか、イヤハヤ大變なお見出しに預かつたものですな、甚はだ以て恐縮で……」

「利いた風なことをいふな、悪いことを巧むには却々抜目のない癖に」

「仆度も恐れ入りましたよ、御挨拶で痛み入りました」

緒方と山田とは何か密々相談を初めたが、一時間ばかりの後、謀畧も決したと見えて山田はすぐ何處か出て行つた。

(十九) 無實の浮説 (其二)

騎虎の勢ひ、殊には正に落花狼籍の斯業に及ばんとした彼の場合、實に止を得ないとは曰へ、彌生に於ける勝次の舉動は、今日までの緒方の遺口に徴しても、恐るべき敵であることを知りながら、あまりに前後を考へなかつた所業である、緒方とて巨萬の富を有する一箇の紳士である、自己の名譽のために、まさか腕力や暴行を以て獸慾を遂げる氣遣ひはない、勝次がもう少し恐んでゐれば、無事に済んだのであるが、勝次はその皮膚に一指を觸れさせるさへ、非常な恥辱であると考へてゐたので、あんな始末になつて了つた。

翌日正也がその事を聞いた時、無名の豪傑が金蘇山であると判つたことは此上もなく喜ばしいけれども、其夜の事から、又しても緒方に宿怨を醸させる基であると思つて、非常に心配した。

けれども、事茲に至つては、最早如何ともすることは出来ない、此上は一日も早く費用を調べ、冬子と正也と相携へて滿洲に渡り、金蘇山を探して、父子の名乗り

をすることは、恐るべき緒方の復讐を避ける道である、正也は日々金策に狂奔してゐた。

兎も角も、正也は辯護士の事務所を閉ざし、その家の雑作や事務所の家具などを賣つて、幾分にも金を調へることにした、徒らに看板を張つてゐても、殆んど居食同様の昨今、一たび滿洲に渡り、更に捲土重来して新しい生涯を開拓することは此場合賢なる方法であると思つたので、些の未練氣もなく、車夫や書生、女中などには理由を告げてそれ／＼暇を出し、價は廉いけれども、六百圓で同業の某氏に譲り渡し、その金で勝次の身を洗ひ、甚兵衛を引連れて、渡滿迄の假住居を牛込邊に定めたのであつた。

勝次はモウ藝妓ではなかつた、昔の冬子に歸つて、着々渡滿の準備に従事してゐる、けれども、正也が事務所を賣つて得た金は、僅に自分の身を洗ふに辛うじて足りない位で、旅費とすべき金は一厘一毛もない、甚兵衛を残して二人で行くとして

も先方へ着くまでには、少からぬ金が必要、鐵嶺までは船や汽船で一週以内には行かれるが、それから先は全く無人境に等しい地を行くのである、少くとも、七八百千圓位の金は用意して行かねばならぬ。

正也の業勉が盛な時でさへ緒方の二千圓に苦められたのであつた、まして今日のやうな境遇になつて、千圓近くの金を正也の手で作ることは實に一大事業である、正也は冬子に心配をさせまいと思つて、いろいろに口實を作つてゐるが、その實胸にはいふべからざる苦悶を懐いてゐるのであつた。

正也は逸りに逸つて金策を試みたが、遂に一つも成功しなかつた、思ひ餘つて不圖彼の胸中に浮かんだのは加藤大佐である、大佐に這んな事情を物語るのは男として不面目極るけれども、今日の場合背に腹は代へられぬ、冬子が藝妓になつた時も淺野の口から金蘇山といふことが判明した時も、彼は大佐を訪ふて一々それを報告してある、事情は委しく知り抜いてゐるのであるから、恥を忍んで相談したら、ま

たよい分別もあるであらうと、冬子にはなんにも告げずに、下澁谷の大佐が宅へ訪づれたのであつた。

(二十) 無實の浮説 (其三)

「ウム、では愈彼地へ渡ることにしたか、辯護士の事務所も閉鎖したのぢやな、それはお氣の毒なことぢや、よくそんなにして下さる、俺は先生の門弟子として感謝に堪へん、冬子さんも藝妓を止めたか、金田先生の遺兒ぢや、長くあんな醜業をしてゐては、お互に困りますぢや、然し藝妓をしたばかりに、這んな端緒も得られたのぢやから、その勞空しからずで結構でござしたよ」

大佐は冬子が正也に義理を立てるため、藝妓になつたものとは信じてゐなかつたイヤ初めからそんなことは聞いてゐなかつたのである、全く父の消息を知るため故

になつたものだと思つてゐたのである。

『所で大佐！、茲に私が頭を悩ましてゐるのは旅費問題、普通の旅行とは違ひますから、少くとも六七百、出来得れば千圓位の金が調はないと、渡満する事が出来ないので、まだ青書生の分際ですから融通の道も絶えて、ほどく弱つてゐるのでございますから、何かよい工夫がございましたら、御示教を仰ぎたいと思ひまして恥を忍んで……』

『ウム、成程々々、よく判りました、有理ぢや、俺も知らるゝ通り、元來が武人ぢやで、まして今は非役の身じや、貯へといつては一錢もなし、借りる所も一寸心當りがないがなア……』

大佐は心から同情したやうに、幾度か首を捻つて方法を案するのであつたが、やがて何か思ひ付いたやうにハタと小膝を打ち。

『オウ、池田さん、可矣方法があるのじや、早く這んな事を聞いてゐたら、御知ら

せするのじやつたが、まさか辯護士を罷められるとも思はんでな、眞は斯ういふことがあるのじや、之は俺が顧問になつてゐる會社じやがな、本社は大連にあるのじや、日支人の合同經營に係る炭礦會社じや、炭礦會社と曰つても業務が頗る複雑で撫順、煙臺の石炭を採掘するのが本業で、副業は八百屋じや、滿洲にあるあらゆる利權を搔つ浚うといふ頗る虫の可い會社じやがな、然し基礎は確實じや、其處で至急に若手の、法學士の肩書がある人が欲しいと曰つてゐるのじや、實務も取るが、まア法律顧問と言つたやうな役でな、月給は百五十圓位出すと曰つてゐたよ、赴任旅費、その他手當なども充分にするといふ話じや、如何でござす、其處へ行つては話やうに依つては給料の半年分位は借られるじやらう、ナアニ俺が話をして、金は屹度借りて上げるじや、六七百の金は手に入らう』

加藤大佐の方案は實に望んでも得難き適當な方案であるが、新任匆々、會社を捨て置いて、金蘇山を尋ねべく若干の時日を空しうすることを、果して會社が許し

てくれるだらうか、恐らくそんな勝手氣儘なことは許すまい、それを考へれば兎ても出来ない相談である、正也は恐る／＼その意味を大佐に先問した、大佐はカラカラと笑つて。

「ナニ、心配せんでも可いです、君が行く氣なら、俺が引受けて會社には條件を持込んで承諾してやる、然し一旦は大連に落ちついて家でも定めてくれんと困るですぞ、その上で一ヶ月でも経つてから名を視察に借りてもよし、事情を打明けてでも可い、俺が保證するのじやから、ナアニ、今の時節は正直眞ツ法は損じや、アツハ、ハ、ハ、……」

(二十一) 無實の浮説 (其四)

ゆくりなくも、加藤大佐の厚意に依つて、思はぬ渡滿の方法を得た池田正也は、

一切を擧げて大佐に托し、大佐の信用を傷つけない範圍に於て、成立するやう盡力してくれど、懇に依頼して別れた。

此會社には滿洲の日本商人が多く關係してゐる、出資者も日本側は大抵滿洲商人で堅めてゐる、大佐は嘗て駐屯軍の隊長として一年ばかり滿洲にゐて、滿洲の情勢に委しく且つ人望が高いので、推されて顧問になつてゐるのである。

所が、此會社には例の鐵嶺洋行主淺野宗二郎が關係してゐる、緒方も東洋銀行の關係上多少は關係があるらしい、大佐から重役への交渉は略纏まつて、重役は其信任する大佐の推薦といふ點に満足して、兎も角も一應本人に會見しやうといふ段取にまで運んだ。

此事は何時か社内の或る者から淺野の知る所と成た、緒方に抱き込まれてゐる彼は、すぐにそれを緒方に通じた、虎視眈々、如何かして池田と冬子とを陥れやうと山田を手先に使つて狂奔しても適當な方策を得なかつた緒方は、之を聞いて躍り上

つた、期せずして二人は自分の陥穴に嵌つて来たものと大に喜び、何か密謀を淺野に託したのである。

淺野は株主の権利なり、また役員である關係から、東京の支店長太田信義に會つて、態ど此事實を確め、抗議を申し込むと同時に、かねての方略通り、池田譚誣を試みた。

『あの池田といふ男は、貴下も御存じでせう、東洋銀行の緒方君を、緒方の同期生で法學士には違ひないが、極質のよくない大山師です、例のチンスーサンが日本人らしいといふ評判を利用して、彼の情婦に金田冬子といふものがあるのを囮にして此の中から切りに金蘇山を種に、詐欺に比しい目論見を立てゝゐるのです、第一辯護士でもしてゐた人間が、女を喰物にして藝妓に賣つて、美人局的のこをやつたり、よくないことばかりしてゐるので信用はなし、事件の頼み手はなし、到頭事務所を閉じて、加藤顧問が同郷人なのを幸ひ、顧問を誑かし、我が社を基礎にして満

洲を荒し廻る計畫なんです、法學士だなんて曰つても丸で三百以上です、あんなものを我社に雇ひ入れては社會の信用を失墜して、碌な結果はありません』
『フム、そんな經歷を有つた強者かね、然し加藤大佐は人物を推稱してゐましたせ』

『イヤ、大佐からして騙されてゐるのです、金蘇山を囮にして、旅費でも本社から捲き上げて、すぐ尻に帆をかける算段でせう、その證據は近來金策に躍起となつて奔走してゐるんです』

『成るほど、大佐から金蘇山一件の話もありました、また赴任後一二ヶ月の後、南滿視察の條件もついでにいましたが、大佐の推薦する人物だからと思つて、無理な條件もすべて許して入社させやうと思つてゐるのですかね……』

『ソ、それが皆豫じめ圖つてあることです、兎に角世間の浮説なり噂を聞いて身元をお調なさい、而して東洋銀行の緒方君を呼んでお聞になれば判ります』

(二十二) 無實の浮説 (其五)

池田の雇傭は殆んど確定の事實になつてゐたのであるが、圖らず理事の淺野から抗議が出て、且つ池田の札付人物なることを説明されて見ると、太田支店長も二の足を踏まざるを得なかつた。

確定議が俄に翻へして、早速池田に對する風説や冬子との關係、身元なぞの調査をした所、不幸にして淺野のいふやうな事實が悉くあるので、複雑した事情の判明しない調査だけに、支店長は大事を取つて終に之を斷ることにした、最も此外にも同期生の緒方に就て調べたが、緒方も同様なことを言つて、彼れを極力排斥した。

太田支店長の意は終に決して、之は定めし加藤大佐からして欺されてゐるもので

あらうと思つて、懇々と事情を書いて、鄭重に斷りの手紙を大佐宛で出したのであつた。

それを讀んだ大佐の驚きは一通りでない、萬そんなことはあるまい、何者かの中傷だらうとは思つたが、尙念のために、早速池田を自邸に招いて、此事實を語り彼の辯明を求めた。

池田も事茲に至つては、最早包み隠すことは出来ない、彼は冬子と戀に陥たことから、緒方の横戀慕、戀の叶はぬ意趣晴らしの差押さへ、八百善の尾行立聞、彌生の暴行まで落もなく物語り、悲憤の涙を注いで之れを大佐に訴へた。

聞く大佐は烈火の如く立腹した、そして一寸思案するものゝ如くであつたが。

「ウム、さうじやつたか、フ、不埒な奴だ、多分その緒方といふ奴の中傷じやらう雇ふて貰はうと貰はんとは別問題じや、名譽に關する重大事件じやから、此辯明はして置かんければならん、よし、是から俺と一緒に會社へ同行し給へ、俺が奴等の

油を絞つてやる』

大佐は虎髭を振り立て、頗る激した、而して池田を顧みて。

「君は一體人間が弱うござす、そんな意氣地のないことじやア駄目じや、その緒方といふ奴は何んといふ名じや、フーン、時男？、熊本のものでござすな、ハテナ、緒方といふ奴は聞いたことのある名じや、若しや親爺を吉兵衛とは言はんかな」

「然うです、吉兵衛と申します、熊本の市のもものではございませぬ、近在の豪農です、中學時代からの親友であつたのです」

「ウム、じやア吉兵衛じやアな、然うか、それなら俺は知つてゐる、彼奴の子ならウンと油を絞つてやるぞ、さあ一緒に出かけなさい」

大佐は尻ごみする池田を叱る様にして引き立てた、而して麴町有樂町の満洲炭礦會社東京支店へ急いだ。

會社の支關に立つた大佐は、見るから恐ろし氣な虎髭を逆立て、怒氣紛々、太

田支店長に面會を求めぬ。

取次の給仕は眼を圓くして、驚いた態で支店長に取次だ、二人は應接室に通され、支店長はすぐ出て来て、懇懇に大佐を迎へた。

大佐は、挨拶もそこ〜、にその武人氣質を遺憾なく發揮して、頭からかみ附いた。

「太田さん、加藤は軍人じや、自己の名譽にかけて信用のない人間は推薦しませんぞ、雇ふと雇はざるは君の方の權利じやが、今日の御手紙には不服がある、その不服を言ひに來ましたじや」

(二十三) 無實の浮説 (其六)

加藤大佐の劍幕は取つても喰はん勢である、太田支店長は、只管恐縮して。

「一體如何いふお話でございますか、一應道行を承はりたいもので……ハイ」
と答へて、デロリと大佐に引き添ふ正也の舉動に注意した、大佐はまだ怒氣鎮まらぬものゝ如く。

「言ひます、無論言ひますじや、此處に連れられたのが本人でござす、池田法學士でござすぞ、本人を連れて辯明に來ましたじや、あんな譏誣中傷を加へられては、前途のある青年が臺なしじや、太田さん、一體今日の手紙の要領は何處で調べましたじや、苟くも名譽あり地位ある人間を……ケ、怪しからん、輕卒な取調じや何ものがあんな無實の浮説を流布しましたじや、當方では立派に辯明するが、君の方では調べた人間があらう、それを出しなさい、俺が、會社の顧問として聞くことがあるから、定めし緒方といふ奴も参加しとるじやらう、其奴が怪しからん奴じや」
大佐は當るべからざる勢で太田に肉薄する、太田は池田に一寸會釋して大佐のいふ所を聞いてゐたが、その劍幕の恐ろしさ、緒方といふ一言に、ハツと胸を突

かれて。

「ナ、何ですか、私には一向判りませんが、あんな事實は池田學士の一身に係ると仰有るのでございますな、無いものを有るとして誣ひたのでございましたら、それは實に申譯がございませぬ、他のお方でしたら、黙つて刻附けて了ひますが、顧問たる貴下のお詞としては然うも参りませぬ、實は理事の淺野が其取調を擔任しましたので、緒方君も事情はよく知つて居られるやうでございます、何れにしましても、會社の内輪のことでございますから、成るだけ穩に……」

「理非の判らん中は穩に出來ん、淺野理事を呼んで下さい、それから緒方といふ奴も、俺が、會社の顧問として用があるから、會ひたいといふ電話をかけて下さい」

かうなつては太田支店長も、此まゝに大佐を有むる譯には行かぬ、苟くも紳士の身分に關する重大事件である、自分の責任としても、一應淺野に辯明させる必要が

あると思つて、給仕をして浅野を呼び寄せ、且つ東洋銀行の緒方に電話をかけさせた。

やがて浅野は何気なく其處へ雲入つて来た、大佐はその面を見るなり、椅子を離れて、昵と彼の姿に見入り。

「何だ理事だなどといふから、どんな人かと思つたら、貴様は鐵嶺洋行の浅野じやないか、オイ、コラ、浅野……」

大佐はまるで浅野を小供扱にする、浅野は初めてそれと氣附いて、頗る狼狽した如く。

「イヤ、之はく加藤大佐殿でございましたか、その後は誠に御無沙汰を致しまして、一寸お伺ひ致さんければなりません、此間一寸歸つて参りまして……」

「ソ、そんな月並の挨拶は聞きたくはない、貴様は俺が推薦した池田法學士の身元調をしたといふな、その調べた順序を俺に話をしろ、而して何處からそんなことを

聞いたのか、それを言へ、例の調子で胡魔化したつて駄目じや、人は知らんが、此加藤の前では貴様大きな面は出来ん筈じやぞ」
大佐と浅野とは舊知らしい、而して浅野は、大佐に頭の上らぬことでもあると見える。

(二十四) 無實の浮説 (其七)

浅野宗二郎は、久しい以前加藤大佐がまだ現役時代、鐵嶺の駐屯軍を率ゐてゐた時、徹々たる商人で、随分如何はしい悪辞手段を講じ、暴利を収めた男で、大佐には幾度か尾を押へられ、且つ救解された恩義があるのだ、大佐が豫備になつてからは、モウ用はないと見向きもしないで、その門に出入もしなかつたのが、ゆくりなく是處で出會つたので、彼は頗る狼狽の體。

「ソ、それは是處では一寸申上かねますので、何れ他日に……」

「何故是處で言へないのか、本人の池田學士も連れて来た、調べた道行を俺に言へ貴様はまた何か悪い手段を書いてゐるな、貴様なんか滿洲破戸漢じやアないか、言はれんといふ法はないじや、オイ、淺野」

「イエ、全くは東洋銀行の緒方君に行つて聞きました事實で……緒方君は池田さんと同郷ださうでございますから……」

「淺野君！、君、緒方君から聞いたばかりではないのでせう、最初は君から出た抗議じやアなかつたのですか、そんな無責任なことを言つては大佐に私が相濟まん」

太田支店長は、不安らしい色を面に漂よはして、淺野を詰つた。

「イエ、全くはその、主として緒方君の説なので、私は會社を愛する心から、そんな浮説のある人は避ける方が可いと存じまして……」

「何んだ愛社心、利いた風なことを言ふな、貴様に愛社心なぞがあるか、私腹を肥

すことばかり考へてゐる奴が人の人格を非議する資格はない……」

大佐は淺野を頭ごなしにするが、淺野は餘ほど大きな弱點でもあるか、一言の抗辯さへしない、形勢は刻々不穩になつて来る、其處へ何氣なく緒方が扉を開いて這入つて来た、緒方は大佐に面識がないから、その人を知らないが、兎に角虎髭嚴しき堂々たる魁偉の丈夫が雷ならぬ氣色で叱咤してゐる、傍には池田正也がある、太田支店長がある、淺野宗二郎までが恐縮しなやうな體で控へてゐる。

彼は室内に漂よふ穩ならぬ風雲を感取して、さてはと形勢を〇度したのであつたが、加藤大佐はツシ椅子を離れて。

「君が緒方さんか、俺は當社の顧問加藤じや、用事は主として俺にあるのじや、早速聞か、君は此池田學士を知つとるじやらう」

「何事ですか、慌ただしいことです、初對面の人間を呼び附けるさへあるに、用事も言はず、突如その態度は何事ですか、大佐であらうが、顧問であらうと、紳士に

は相當の禮がありません、無禮でせう』

緒方は流石に法學士の貫目である、淺野の如き成り上りの商人とは逆も比物にならぬ、此場の形勢を見て取つて、大佐の度膽を抜くべく、高飛車に一本極め附けた大佐も之には少しくタヂくの体であつた。

『然うですか、なるほど一應は有理に聞える、然し俺は汝さんを紳士として見て居らん、君は紳士の積じやらうが、俺の目から見たら緒方吉兵衛の小倅なぞは紳士の中に入られんぢや、アツハツハツハ、』

『ナニ、緒方吉兵衛の小倅、シ、失敬な奴だ、キ、貴様は何んだ、額が非役の軍人だらう、無禮者ッ』

緒方は怒氣心頭に發して、大佐と池田の面を等分に睨んで椅子に着いた。

(二十五) 無實の浮説 (其八)

『如何ぢや、緒方！本人の池田が既に事實を表白してゐる通りぢや、強辯しても不可ん、戀の叶はぬ意趣晴らしに、いろくゝの悪計を掻いたことは之で明白ぢや、辯明が出来るならして見い、小癩な奴だ、富は人の地位を支配するかは知らんが、人格は金では買へん、卑劣千萬な奴ぢや、いふことがあるなら云ふて見い』

加藤大佐は池田をして、殆ど對質的に太田支店長が指摘した池田の缺點を辯明論難せしめた後、斯う云つて緒方を睨み附けた。

緒方は目のあたり池田を前に置き、大佐の如き有力な掩護が傍から口を入られずには、素より悪計を全んで正也と冬子とを陥れやうとした奸策とて、非は理に勝つことは出来ぬ、然し彼とて此場合決して淺野の如く黙して引つ込む男ではない、強辯につぐに強辯を以てしたが、如何せん、太田支店長を初め列席する人々の心證には、緒方が何んのために池田を非議したかといふことは明かに觀取されてゐる、それでも彼は尙強辯を續けやうとする。

「君方が如何に池田を辯護したからとて、彼が金田五郎の遺児を籠絡して、之を政略的情婦とし、その蓄財を引き出して浪費したやうな行爲が、人格の高明な人の所業であるか、常態で判断して見ろ、君方は此場で強辯しても、多數の社會は池田の人格を認容してはくれんぞ、第一顧問の力を利用して、威喝的にそんな人間に押し付けやうとする君は何だ、池田と同腹ぢやらう、苟くも會社の爲を思ふものが、金蘇山搜索の費用を得んがために、這んな不法な行爲を演ずるとは不埒千萬だ」

「オイ緒方、言ふまいとは思つてゐたのぢやが、貴様あまり高慢ちきなことをついで、言て聞かしてやる、貴様が紳士々々と一廉人格でもあるやうに言ひ居るが、貴様の父の吉兵衛といふものの素性を洗ひ立てたら如何ぢや、人は知るまいと思つてゐるやうが、此加藤は皆知つてゐるのぢや、貴様の父の吉兵衛は、元緒方家の下男ぢや、可矣か、その下男が緒方の若い寡婦を蕩らして入夫になり、それからその女房を虐待して、悶死させた後で、甘々と緒方家を乗取つて、財産を横領し、藝妓だ

か女郎だか素性の判らん女を引入れて、生したのが貴様ぢや、然ういふ血を承けた貴様の人格は如何だ、惡辣の親爺をそのまゝぢやらう、俺は貴様のことは知らんが貴様の親爺のことはよく知つてゐるのぢや、女を喰物などは何處を押せばそんな音が出る、紳士などは片腹痛い、いふことがあらば言つて見い」

意外、意外、大佐は際どい所で緒方の素性を素ツ破ツ抜いた、池田を初めその他の面々緒方に對するかゝる秘密は今聞くのが初めてある、大佐は是處へ來る時、彼の父の名を再三確めたのは之れあるからであつたと合點された。

緒方は、此の素ツ破抜に、確かに覺えがあるか、ブル／＼と身を慄はして齒を嚙み。

「な、何を證據に、無根の事實を以て人を誣ふるか、言へ、そ、その分では置かんぞ」

と、威猛高になつて、詰め寄せるのを、這はたゞ事ならじと先刻からハラ／＼し

てゐた太田支店長は、中に這入つて之を遮り。

『もう可矣です、判りまし、たすべて不明の責任は僕にあるのです、責任は僕が負ひますから、何事も穩便に……孰方も私に一任して下さい』

(二十六) 狼軍襲來 (其一)

思ひも依らぬ加藤大佐といふ邪魔が這入つて、緒方の悪策は再び失敗に歸したばかりでなく、秘密にしてゐた緒方家の悪歴史さへ曝露されるに至つて、斂を突いて蛇を出して了つた。

結果は如何に成り行くことかと、人をして手に汗を握らせたが、温厚な太田支店長が、責任を自分の一身に引き受け、双方を慰諭して自分に一任を求めたので、緒方は之を幸ひと多く襁褓を出さぬ中に手を引いた、加藤大佐は凱歌を揚げて、愉快

さうに池田を連れて引き下つたが、それから数日の後に至つて、太田支店長は、大佐に自己の輕卒不明を謝し、此場合池田を雇ひ入るゝも穩でないから、時機を待つこととして、その代り金蘇山搜索の目的を賛し、私金千圓を加藤大佐の前に提供しやうと妥協的に申し込んで來た。

大佐もその意を諒し、池田が固く辭退するのを、叱り付ける様にして、自分が借主となつて金千圓を太田の手から受取り、それを旅費に二人を滿洲へ出發させることにしたのであつた。

正也は大佐の行届いた義侠的行爲を深く感謝し、冬子にもかくと告げて、愈かの金蘇山、北滿洲の邊境に搜索する首途に就く。

たゞ二人が滿洲に行くについて頭を悩ました一事は甚兵衛の所置である、甚兵衛は是非共一緒に連れて行つてくれろと強要して止まない、泣いて二人に頼む哀情は諒とするけれども、年老いて二人の爲に足手纏ひとなるばかりか、三人となれば費

用も多きを要することになる、乏しい懐で、それが第一の苦痛である、正也と冬子とは泣いてこの事情を物語り、必ず父を携へて歸つて来るから、それまで待つてくれと、ヤツと甚兵衛を心得させ、歸京するまでの間を加藤大佐に託したのであつた、大佐は初めから甚兵衛を同行しらいことに賛成してゐたので、快く彼の一身を引受け、我家に引き取つた。

正也と冬子とは一切の準備を整へ、いろのく意味を有つた、思出の深い一種の冒險的旅路に就くのである、顧みると恍として今日までの経過が夢のやうに浮く、然も前途には尙幾多の難關が横はつてゐる、二人の身は運命の神ならでは、その將來を知ることは出来ない、幾多の危具と而して希望とは二人の胸に走馬燈の如く映する。

九月の下旬、愈二人は新橋から流車で神戸まで西下し、其處から大連に渡る汽船に搭乘すべく、渡滿の首途に就いた、素より秘密の旅行であるから、誰にも通知

はしなかつた、密に行くつもりである。

停車場には加藤大佐と甚兵衛とが見送りに來てゐる、大佐はいろく滿洲の經驗談なぞして、發車を待つ間に二人に注意を與へる、甚兵衛はもう胸が一杯になつて涙を啜つてゐた、冬子はそれを見るに堪へず、車内に這入つて視線を避けた。

やがて汽笛一、聲流車は徐々と搖るぎ出した、二人は車窓から顔を出して目禮する、冬子は甚兵衛を見た目には涙が一杯であつた、甚兵衛は堪まりかねたか、我にもあらで走り寄つて搖るぎ出した列車に縋り附かうとするのを大佐は驚いて之を支へた。

列車は一抹の煤煙を長く曳いてもう構内から姿を隠してゐる。

(二十七) 狼軍襲來 (其二)

正也と冬子とは其翌日神戸に着いた、而して大連行の二等船室の客とはなつたが船は其日の午後一時に神戸を出帆して、極めて愉快な穏な航海を続け、四日目に大連に着いたのである。

大連に一泊して、前途の方策などを相談した上で翌日氣車で大連から鐵嶺に向つた、鐵嶺に下車するまでは、日本の内地を旅行するの少しも變りはない、また鐵嶺から五六里の間も何ともないが、日本の勢力範圍を離れた土地に這入ると、それから次第に山奥に行くので、支那政府の統治は少しも行届いて居らぬ、二人の旅路は之からが難關である。

正也は幸ひ加藤大佐から數通の添書を貰つて居るので、鐵嶺に下車すると、取敢ずホテルに入り、鐵道守備隊や日本の官憲を訪問して、具に目的を語り、その保護を求めると同時に、旅行の日程や、途中で宿泊すべき場所、道の案内圖を作り、充分の用意を整へて、地圖を唯一の力に、二人手を携へて愈范家屯の邊陲を志し、

出發したのであつた。

何しろ警察などの設けもない、部落と云ふても、三里に一つか五里に一つの、山と畑で圍まれた無人境に比しい地を行くのである、充分の用意がなくてはならぬ。

正也が最も不安を感じたのは、冬子の姿である、女としては如何しても危険である、正也は支那語の修養がないが、冬子は這んなこともあらうかと、かねて支那語を研究してゐたので、覺束ないながらも、日常の用を辨するだけの智識はある、其處で支那人に變装し、且つ男の姿を装せることにした。

冬子は艶やかな深のやうな黒髪を解いて早速之を辨髪にし、態と滿洲土人の着る目立たない淺黄色の粗末な支那服を身に着け、全然滿洲土人の男裝になつて了つた正也はカキ色の詰襟服に草鞋脚絆を着け、烏打帽を冠つた輕裝で、糧食や荷物の運搬、且つは道案内にするため一人の支那苦力を連れていよく蒙古に近い范家屯

の山中を指して出發した。

范家屯までは日本里程で四十里ある、男の足なら一日に五里乃至六里は優に歩行が出来るが、何をいふにも冬子は女の足、殊には靴穿きである、無理をしてはならぬと注意して、一日に五里位の程度に進んだ、それでも冬子に取ってはそれが至大の苦痛である。

一日、二里はまづ無事に經過した、狭い陋苦しい支那民家に辛うじて宿つて、その宿つた土地から高ら賃錢で苦力を雇ひ入れ、淋しい心細い旅行を續けてゐた然し如何に負の氣の、氣丈な冬子でも元來が女である、張り詰めた氣と、前途の希望に生きた心で、弱い氣も見せず、且つは正也に心配させまいと、苦痛を忍んでゐたが、實は氣候の變化やら、急劇な運動とに、日一日と疲勞を加へ、餘ほど弱つてゐる様子である、それでも負の氣の彼は、痛む足、勝れぬ心地を堪へて、正也が幾度か、心配して、その様子を聞くのを拒げ何ともないといつて旅行を續けて

ゐたのであつた。

(二十八) 狼軍襲來 (其三)

鐵嶺を出發してからモウ五日目である、今日は朝から冬子が疲れ切つた顔をして元氣のない姿であるのを、正也が太く心配し。

「冬子さん、今日は大變顔色が悪いやうです、馴れない旅の上に、人里稀な這んな土地を、毎日歩いてばかりゐるのですから、定めし體に異状も起りませう、無理をしてはよくないです、若し出發してから異變でも起つたら、人家もない土地で難儀をしますから、急ぐやうな急がない旅です、先に心は急きますが、少し静養して體を休めてから出發させよう」

正也はその背を撫でるやうにして慰めたが、冬子は頭を振つて。

「正也さん、け、決して心配して下さいますな、妾は大丈夫でございます、之れしきのこと倒れたとあつては、父に逢つても面目がございませぬ、それよりか貴下は大丈夫でございますか、妾、それが心配で心配で堪まりませぬ、こんな苦勞をおさせ申して……一日も早く父の安否を知りたいのですから、さア出發致しませう、苦力の用意は宜しいのでございませうか」

冬子は強ひて元氣を装ひ、自ら先に立ち靴を穿き、早くも出立の用意をする、正也は氣遣はしさうにそれを見てゐたが、案外元氣が確なので。

「大丈夫ですか、冬子さん、苦力の用意は出来てゐますが、大丈夫ですか」

「エえ、大丈夫です、大丈夫ですとも、さア参りませう」

正也は多少氣遣はしいとは思つたが、實は行手を旅ぐ急である、大抵のことは恐んで、一日も早く志す處へ行着きたいので、さらばとばかり、勇を鼓して出で立つた。

行く途も行く途も、たゞ荒寥、高粱畑、趣味もなければ變化もない苦力は先に立つて、ドシドシと進んで行く、冬子は兎もすれば遅れ勝である、正也は之を扶け、一方苦力を叱咤して進むほごに行くほごに、凡よ三里位も歩いたかと思ふ頃、冬子は依然として、道の傍に卒倒した、秋の日の暮るゝに近く、暮色既に蒼然たる所である、之はとばかり驚いた正也は、倒れた冬子を抱き起し。

「冬子さん、如何しました、確乎して下さい、モウ少しで次の部落まで行きます、オー背負ひませう、僕の肩に手をおかけなさい」

と、正也は冬子の手を取つて肩にかけやうとするが、冬子はただハッハッと大きな息を吐くのみに、口を一文字に閉ぢたまゝ、開かうともせぬ、正也は狂氣の如く。

「冬子さーん、確乎して下さい」

と、大聲に叫び、一方苦力を叱咤して水よ薬よと騒ぐが、苦力は宛然路傍の人の

如く、たい笑つて其處に立つてゐる。

「爾、不殺本、水、水、快々の……」

と叫ぶけれども、苦力は何をしやうともせず、相變らず、笑つて立つてゐる。

「冬子さーん、確乎して下さい、まだ倒るべき時ではありませんぞ、た、大變だ、昏睡してゐる、イ、醫者と云つた處で、こんな處に醫者はなし、コラ、苦力、水を持つて来いといふに……」

正也は一人で氣を揉んでゐる、冬子は相變らずハツハツと大きな息を吐くのみであつた。

(二十九) 狼軍襲來 (其四)

漸くにして正也は四邊を流るゝ小川を發見し、その水を掬んで、冬子の口に含ま

した、冬子は少しく正氣づいたが、微に目を腫き、沈と正也の面を見て。

「ま、正也さん、申し、申譯もございません」

と、曰つたが、氣力は衰へて立つべき元氣はない、ただ眼を閉ぢて昏々たる體である、正也は途方に暮れた、一人で氣を揉むけれども如何とも詮方がない、日は既に西に落ちて、見渡す限り茫々漠々たる北滿州の廣野、否山間の平原は人ツ子一人通らず、人家のある部落迄はまだ二里餘もある、正也は氣が氣でない、此上は苦力と二人手を協せて、冬子を肩にかけ、行ける處まで行くより外に仕方がない、勇を撃して、自ら冬子を背負ひ、一寸先も判らぬ眞ッ闇な異郷の土地を、トボくと進んだ。

十月の初旬とは曰へ、内地と違つて滿洲は雪こそ降らね、朔風凜烈、北風がビエウくくと吹いて、手は凍へる、足は痺れる、況して死人同様の冬子を肩にかけて歩く正也の難義は一通りでない、彼も元來頑強な體ではなかつた、孰方かと曰へば蒲

柳の質である、たゞ今の場合、弱い心を起してはならぬと、氣だけで足を運んでるのである、従つて二町行つては休み、一町行つては息を入れて、所謂一步一喘、道は少しも抄取らぬ、冷酷無情な苦力は、此状を見て正也を助けやうともせず、何かブツ／＼と小言を曰つて不平らしく、仕様ごとなしに眠るて行く、彼は遺憾なく満洲人の性質を發揮してゐる。

正也は氣ばかり焦つても、心は之に伴はぬ、足はなえ、氣力は衰へて、辛うじて一里ばかりは歩をつゞけたが、モウ一步も足を進めることは出来ぬ、時刻は既に八時頃となつてゐる、彼はヨロ／＼として冬子を背負ふたまま、終に道とてもない山間の狭間に行き倒れた。

喘々焉として、殆んど氣死の体である、苦力がかくを見て、肩にしてゐた荷物を其處に抛り出し、黙つて、サツサと勝手に進まうとする、正也は驚いて其の袖を尻へ。

「オイ苦力さん、何處へ行くんだ、モウ少しだ助けてくれ」

苦しい息を吐いて哀訴する、かうなつてはたゞ一人の苦力でも彼に取つては百萬の味方である、今逃げられては二人と、茲に行倒れとなるより外に仕方がない、彼は無念を堪へて手を合した。

苦力は一尙平氣である、正也の捉へた袖を振り拂つて。

「私、急ぐことあります、約束違ひます、貴下待つこと出来ません、先へ行きます時間経ちました、袖放して下さい」

と、ツと正也の手を拂つた、正也は痛む足を引き摺ながら。

「君、ソ、そんなことを言はずに、賃錢はいくらでも出すから、モ、モウ少しだ、ボ、僕は足を引き摺つても歩いて行く、コ、この人を背負ふて行つてくれ」

掌を合して、必死と頼むけれども、苦力はそれを顧みやうともせず、セ、ラ笑つて。

「日本人、意気地ないことあります、死ぬ事よろしい」
と、終に杖を拂つて走るが如く彼方に去つて了つた。

(三十) 狼軍襲來 (其五)

取り残された正也は、片手に冬子を抱き、聲を限りに苦力を呼んだが、その聲はたい山間に響くのみで答へるものはない、二人の運命は刻々に迫つて来る。
正也はモウ運を天に任した、残念ではあるが、之で此まゝ満洲の土になるとも今は悔ゆる所ではない、冬子はその姿を見れば氣息奄々として僅に息をするのみである、正也は裂帛の如き沈痛の聲を絞つて、切りに冬子の名を呼んだ。
「冬子さん、不幸な我々の運命は是處に迫つて來ました、シ、然し、座して倒れるのも残念です、勇を鼓して、モ一度行ける處まで行きませう」

と、ヨロ／＼しながら立ち上つた、冬子は少しく氣力を恢復した如く。
「マ、正也さん、カ、肩を、借して下さい、少しは氣分も落ち着きました、タ、倒れるまで、ス、進みませう」
「オウ、元氣が出ましたか、嬉しい、確に次の部落までは此道を一筋筋です、さア行きませう」
正也は之に元氣を得て、冬子の右手を自分の肩に支へさせ、それでも一生懸命、少しばかりの荷物など、苦力が捨てたまゝにして、トボ／＼と山道を縫つてゐたが如何道を迷つたものか、段々奥深い山間に這入つて行くやうな氣がする。
行けども／＼平野らしい處へ出ない、不安と危惧とは胸を衝いて、その上に寒さは愈烈しくなつて行く、すると、突然行く手の方に當つて、何かは知らぬが、足音らしいものが聞える、つづいて唸るやうな聲がする、正也は耳を澄ましてその首を聞き分やうとする、物音は刻々に近づいて早や二人の眼前に現はれた、見れば毛

色の白い、犬の如くにして犬の如くにあらず、犬より更に身體の大きい、狼に似た動物の一群で凡そ十頭近くはあらうと思はれる。

正也は冬子を後に庇つて、ポケットに入れた大形の懐中電燈を取り出し、行く手の方を透かし見て、叶はぬまでもと、腰にした用意の短銃を右手に取つて、身構へをした。

此動物は滿洲に特産する野犬の一種である、土人は稱して狼といふ、つまり滿洲の狼で、野犬の一種ともいふし、狼の一種だともいふ、家畜ではない危害を加へる猛獸であつた。

たゞさへ疲労困憊した正也は、半死の冬子を抱へて、目前に此狼群の襲來を受け殆んど絶体絶命である、今こそ運命の極まる處である、叶はぬまでも、逃げられるだけは逃げやうと焦るが、道は不案内、殊に一本道である、進退は茲に谷まつた、狼群は用捨なく、二人の身邊に迫り、牙を鳴らし、物凄いな唸りを上げて前後左右か

ら飛びかゝつて来る、正也は冬子を庇つて。

「フ、冬子さん、猛獸の襲來です、シ、確乎掴まつて、逃げるのです、さア逃げるのです」

道を左に轉じて、茨や小笹の中をも物ともせず、ヨロめく足を踏みぬめて、一生懸命に逃げ出したが、狼群は追ひ絶つて先に進んだ一頭が正也目掛けて飛びつかうとする、正也は右手に持った短銃の火蓋を切つた、狙ひも何もあらばこそ、一發又一發、四五發を連發して確に一二頭は倒した様子、その際に、方角も何も定むる處ではない、一散に走つて行つたが、其處は崖の上であつた、二人は相抱いたまゝ足踏み外して千仞の崖下に墜落した。

(三十一) 不思議の命 (其二)

幾多の危難と戦つて既に目的に近づかうといふ時、一たびは疲勞に氣死せんとし二たび無情の苦力に捨てられ、三たび狼群の襲來に逢つた正也と冬子は、之を遁れやうとして、黑白も別かぬ夜の山野に途を失し、終に千仞の崖上とも知らず驅けて行つて、その谷底に墜落した、二人は生きたか、死んだか、谷底にその身を横へたまゝ、身動きもしない、かくても尙相離れじものと、二人は相抱いてゐた。

暫くすると、谷の峽間でも驅けて來るのか馬蹄の音が聞えて、異様の服裝をした二三人の土人が、舊式のモーゼル銃を肩にかけ、其處に近寄つて來た、二人の墜落した場所まで來ると、ビタリと馬の足搔を止めてヒテリと馬を下り、一同其處に近寄つて來る。

二人が冬子と正也とを抱き起して切りに介抱すると、一人は何か藥の様なものを出して口に含ました、二人はまだ生死さへ分らずグタリとしてゐる、土人は二言三言囁いた後、各自一人を馬背に乗せて、又も馬上の人となつゝり、何處かへ飛んで行つた、その敏捷なこと驚くばかり。

土人の駆けて行つた道程は長くも無つた、七八町も行つたかと思ふと、其處に一軒の家屋があつて、三人の土人は馬を下り、二人を抱へて中に遁入つた、其處に住む土人は三人の外に、誰の妻か三十恰好の女が一人ゐるのみであつた。

三人は親切に冬子と正也とを介抱する、婦人もそれに手傳つて、水や藥を與へた甲斐があつて、まづ正也が蘇生した、そして不思議さうに四邊を見廻す、土人の内で年嵩の四十位とも見ゆる男が。

「オツ、貴下、息吹き返した、喜ばしいことある、大丈夫ありますか、體、怪我ありませんか……」

と聞く、正也は初めて我に返つて、愕然としたが、不圖氣がついて、自分の傍を見る、其處に冬子が横はつてゐた。

「オ、冬子さん、冬子さん、人家に來ました、確乎、確乎……」

ど、叫んだ、冬子も既に蘇生してゐたのであつたが、之は起き上る氣力もないと見えて、昏々と半死半生の体で眠るが如く、覺むるが如く、僅に息を吐いてゐるのであつた。

正也は脈を取り、心臓に手を當たりして、確に息のあることを認め、ホッと息を吐いて安堵の胸を撫でたのであつた、少しく心が落着くと、墜落して打つた爲めでもあるか、俄に腰のあたりに痛みを覺へて、思はず其顔を擧めた。

土人は圍爐裡のやうなものを圍んで、長い煙管でスバ〜と煙草を燻らしつゝ、二人の様子に注意した。

正也はやがて土人に向つて。

「私達は范家屯まで行くもので、途中で道に迷ひ、狼のやうな獸物に追ひかけられ峽のやうな處から落ちたと思ひましたが、それから先のことには判りません、君達が助けて下さつたのですか」

かう聞くと、かの年嵩の一人は、笑ひながら頷いた、而して。

「何か甚い物音した、怪しいことあると思つて見に行きました、貴下二人落ちてゐることある、連れて來ました」

(三十二) 不思議の命 (其二)

正也はかの土人を熟々と打ち見て感謝に堪へぬ如く。

「實に有難うございました、既にあのまゝ息の絶ゆる處を、君達のお蔭で命拾ひをしたのです、お禮の申しやうもございません、然し此處は何んと曰ふ所でございませうか、そうして貴下方は此處で何をなさるのです」

命は助かつたものゝ、山間にたゞ一軒の獨立家屋、或は馬賊なぞの住家ではあるまいかと、不安の色で、恐るゝかう聞いた、土人は悠々と煙草を燻らして、相變

らすニヤ〜笑つてゐる。

「貴下、日本人ありますな、その人支那人ありません、日本女あります、アハム」

正也の間ひには答へずして、冬子を指して日本の婦人だといふ、愈以て油断の
ならぬ奴と、正也は前門の虎を防いで、後門に狼の心地である、冬子はと見ると
次第に心地よく元氣恢復せるものゝ如く、微かな聲を絞つて。

「マ、正也さん……」

と、呼んだ、その聲に正也は驚いて冬子の側に摺寄り。

「冬子さん、冬子さん、氣力を恢復しましたか、モウ大丈夫です、安心して下さい
是處は土人の家です」

「ソ、然うですか、もう大丈夫でございますわね」

「大丈夫です、大丈夫ですとも、マアもう少し静に寝てお在でなさい」

と、言ふと、かの年嵩の土人の妻らしい女に何事か囁いた、すると婦人は毛布で
作つた蒲團の様なものを取り出して、冬子の上にかけてやる、見かけに依らぬ親切
な處があるが、善悪を付りかねて、正也はこの人物を判断するのに苦心した、然し
何れにしても生中隠し立をすることは却つてよくないと考へたので、土人に打ち向
ひ。

「君が察する通り、僕は無論日本人、此の人も日本人の女です、范家屯まで行くの
に途中の危険を考へて、土人の服装をして來たのですが、是處は一体何んといふ所
で、范家屯まで何里位あるのです」

「是處は部落ない、山の中の一軒家あります、范家屯まで日本里數、十里ありま
す」

「ナニ、十里！、ではもう少しですな、一兩日此の人の氣分が好くなるまで泊めて
下さい、金は幾何でも出しますから、そして出發する時に次の部落まで送つて下さ

る譯には參りませんか」

「金、いらぬ、泊ることよろしい、送ること出来ない、貴下二人、連れて行く處ある、アハムムム」

「ナニ金はいらぬ、泊つても可矣、送ることは出来ない、そうして連れて行く處があるとは、ド、何處へ連れて行くのです」

正也は土人の意外な詞、その怪しい態度に恐れを抱き、息を喘ませて反問した、然し土人は相變らず莞爾々々笑つてゐる。

「何處でもよろしい、恐いことない、命取りません、其處へ行けば判ることあります」

土人の詞は、いよく出で、愈不可思議である、正也の胸は不安の思ひに、烈しく動悸を打つてゐる、一體此男は何者であらうか、正也は益々判断に迷ふのであつた。

(三十三) 不思議の命 (其三)

「僕達は范家屯まで急ぐものですから、そんなことを言はずに、是處から道しるべを附けて、是非立たせて下さい、命を助けて頂いたお禮は屹度しますから……」

正也は土人を拜まんばかりにして頼むのであるが、彼は笑つてばかりゐて、少しも之を聞き入れない。

「禮要りません、恐いことありません、助けた人、屹度連れて行くことあります、後で返します、死んだと思つて我慢すること宜しい、アハムム」

死んだと思つて我慢しろとは實に不可思議な詞である、何の必要があつて、何處へ連れて行かうといふのだらう、實に奇怪至極な土人である。

「貴下方は一體何をなさる人です、そして、何の爲めに何處へ連れて行くのですか

それを言つて下さい、それが判れば行かないこともありませんから……」

「其理由、此處でいふこと出来ません、先へ行く、よく判ります、貴下一体范家屯何しに行きます、范家屯小さい村あります」

「イヤ小さい村か、大きい村か知りませんが、僕達は范家屯へ行くのでなくて、范家屯の北の方へ人を尋ねに行くのです」

「范家屯の北に村ない、何様な人尋ねるありますか……」

「正也は一寸答へに窮したが、却て目的を告げた方が可矣と思つて。」

「では言ひませう、僕達の尋ねる人は金蘇山といふ人です、チンスーサンといふ人です、その人を尋ねるために、いろいろの難義をして遙々日本から尋ねて来たのです」

「ナニ、金蘇山大人、アノ金蘇山、貴人金蘇山大人尋ねるありますか……」

土人は頗る驚いた風である、配下らしい他の二人と顔を見合して眼を圓くしてゐる。

る。

「然うです、その金蘇山先生を尋ねるのです、君達は蘇山先生を知つてゐますか、知つてゐるならば、然ういふ理由ですから、何處か知りませんが、此ま、僕達を其處へ案内して下さい、お願いします」

「貴下、金犬人、何用ありますか、日本國、遠い、わざわざ来る、要何ありますかソレ話すよろしい」

「イヤ、それは此處でいふことは出来ません、それだけは云へません」

「ソレ云はない？、私、連れて行きます、いふ歸します」

「けれども、之ればかりは金先生に逢つた上でなければ云はれないのですから、許して下さい」

「不可ません、いふこと宜しい」

「實に困つたな、そんなら君達に聞くが、金先生は日本人でせう、まづそれから云

つて下さい」

「ナ、ナニ、金大人、日本人？ア日本人……」

土人はまた大袈裟に驚きの表情をしたけれども、すぐに氣を代へて、カラ／＼と打ち笑ひ。

「アツハツムム、金大人、日本人ない、違ふあります、支那人、満洲人あります、アハムムム」

正也は殆んど當惑した、日本人といへば、事情を告げる筈であつたが、之を打ち消されたのでまた口を緘んだ。

(三十四) 邊寨の怪傑 (其一)

正也と冬子とは、既に失ふべかりし命を不思議にも、怪しい満洲土人の手に助け

られて、冬子が元氣を恢復する迄引き止められ、さて目的の范家屯に向つて尙もその行を續けるつもりが、何んの故とも知らず抑留されて、何處へ連れて行くのか、その命に従はねばならぬことゝなつた。

それも之も皆運命である、什麼いふ結果に陥るかは知らぬが、逃げやうとて逃がしめすまじ、また逃げたとして土地不案内の此滿洲で如何することも出来ぬ、二人は覺悟をきめて運を天に任した。

冬子は數日ならずして全く元の通りの身体になつた、疲勞が原因であつたのだが、静養するに従つて忽ち恢復したのである、冬子が恢復すると、かの土人は愈々二人を連れて行くといふ、滞在中も努めて厚意を盡してくれた、たゞ合點の行かないのは此一事である、兎に角先方へ着いて見れば、吉か凶か判明しやう、覺悟はその上のことと、二人は相談を決めて、土人の詞に應じた、するとかの年嵩な男は、若い配下らしいのを一人連れて二頭の馬に跨り、各正也と冬子とを一鞍に同乗さ

せて出發した。

西を見ても東を見てもたゞ灌木のみの山と、高粱畑と稀に芥子畑を發見する位のこと、土人と云つても三里に一人か、五里に二人位行き逢ふに過ぎない、朝の七時頃に出發したが、正午頃に一つの部落に着いた。

其處で馬を下りて一同は食事をする、馬に糧を與へなとして、一時間ばかり休んだ後、再び行を續けた。

一里ばかり行くと、かの土人は今休んだ所が范家屯だといふ、池田は引ッ返したと思ふが、馬上に助けられて乗つていける身の如何することも出来ぬ、范家屯からは道が非常に險しくなつて此四邊には珍らしいほど樹が繁り、山が深くなつて行く北滿洲でも勝れた土地に相違ないと思つた、午後の三時頃、漸く目指す所に着いたらしい。

其處は部落でも何でもないが、滿洲式の土壁が一面に積み立てられて、頗る廣大

な構へである、土壁の中は、粗末な家屋が二三十棟も立並んでいる、素よりかかる邊寨のこととて建物とは名ばかり、中央に瓦の如きもので葺いた屋根の家が三つ四つあるが、他は皆高粱や粟のやふなもので葺いた家ばかりであつた。

土人は圍壁に入ると、馬を下り、其所に繋ぎ、二人を與へ〜と導いた、其所には男や女や、大勢のものが宛然一家族の如く睦み合つて、その間にかの土人の如き異様な服装をした男が三々五々徘徊していた。

正也も冬子も一種異様な此光景を觀取した、同時に今までの恐ろしいといふ不安の念が、何故か知らぬが打ち消されて行くのであつた。

土人は二人を瓦葺の真中の家に導いた、其處には温爐も通つて、敷物はアンペラであるが、比較的綺麗で毛皮なぞが敷いてある。

若い方が二人を監視してゐると、年嵩の方はそのまま其處を出て、本屋とも覺しきへ出て往つた、二人は暫らく其所に待つてゐた、一時間ばかりすると、かの年嵩

の男が此方へと二人を導くのであつた。

(三十五) 邊寨の怪傑 (其二)

二人は土人に導かれて本家へ行つた、其處でまた少し待つてゐると、やがて鬮を排して這入つて来た老人がある、辨髪をくるくると頭上に巻いて、關羽の如き髭を垂れてゐる、半白半黒で殆んど顔の半を掩ふてゐる、デツブリとした背の高い、眼に一種の威嚴を有つた堂々たる老丈夫である、その後には二三人の從者らしいものが跟いてゐた。

二人は之を仰ぎ見ると共に、思はずその威に打たれて首を垂れた、それと同時に二人は顔見合せて何か雷ならぬ心理作用を起したらしい。

老丈夫は靜かに其處に這入つて来て、中央の支那椅子に腰を落した、卓子を挟ん

で二人は之と相對したのである。

「途中で抑留して甚だ相濟まんですが、お聞き申したいことがあつて、お伴れ申したのです、貴下方はお二人とも日本人ですなア、日本の狀況をお伺ひ申したいので」

驚くべし、老丈夫の詞は明快な日本語であつた、純然たる日本人の發音であつたア、此老丈夫、さては金蘇山ではあるまいか。

正也も冬子も此邊寨に入つて、此明快な日本語を聞いた一刹那、さてはと思つた土人が強て導いたのは金大人の住家であつたらしい。

冬子はモウ恍乎したやうに、沈乎と老丈夫の面を見入つてゐたが、何時か眼には露が宿つて、聲さへ慄へ。

「アツ、モ、若し、ア、貴下は金蘇山と仰有る方ではございませんか……」
と、身を卓子の上に半ば突き出してその威嚴ある面を下から覗き込むやうに、沈

と飽かず見入つた、正也も返答如何にと身を固くして片唾を飲む。

老丈夫は案外落ち着き拂つて、詞も頗る悠乎と。

「如何にも金蘇山といふのは俺のことぢや、今配下に聞けば、貴下方は金蘇山を尋ぬるため遙々日本から来たこの事ぢやが、俺は日本人に知己を有たん」

「エーッ、そんなら貴下が金蘇山先生、アノ金先生、それでは熊本の金田五郎でございます、金田五郎でございます、金田五郎と仰有つて下さい……」

「ナ、ナニ、俺を、カ、金田五郎、カ、金田、五、郎、ウム」

と、老丈夫はヨロ／＼と椅子から轉げ落ちんばかりに驚いた、正也は隙さすその尾について。

「金は金田の金、蘇山は五郎先生の號、金田先生に相違ございません、遺兒の冬子と、先生の知遇を受けた池田芳則の伴正也が先生の踪跡を知らんがため、苦心に苦心を重ねて、遙々此處まで尋ねて参つたのでござります、先生！、先生！、金田五郎だ」と仰有つて下さい」

老丈夫は眼を閉ぢ、腕を拱ぬいてヂツと考へてゐたが、ツと椅子を離れて、無量の感に堪へぬ如く。

「隠しても隠されまい、如何にも俺は金田五郎だ、カ、金田五郎だ……」

「エーッ、そんなら、やつぱり、お父様、アノお父様でございますか、阿蘇の甚兵衛の手に養はれた娘の冬でございます、冬でございます」

と、冬子は狂氣の如く蘇山の膝に縋り付いた。

(三十六) 邊寨の怪傑 (其三)

「金田五郎はモウ死んだのぢや、五郎は生きてゐると思ふな、金蘇山でもよい、父は金蘇山ぢや、それにしても俺が這んな邊寨にゐることを如何して知つて、かかる

冒険をして来たのミ、それを聞かしてくれ」

五郎は従者を盡く其處を立ち去らせて、今は只三人座するのみであつた、冬子も正也もあまりの嬉しさと、あまりの意外に氣も心も殆んど轉倒して、夢心地である冬子の如きは彼れほどの勝氣も、張り詰めた氣が一時に弛んだものか、ただ涙に正體もない態であつた。

正也は冬子に代つて、そもく阿蘇山上の奇縁から、三年目の再會、更に父芳則が先生の知遇を受けたこと、古手帳の發見、緒方が戀の悪計より最後に加藤大佐の厚意を得たことまで長々と物語つて。

「先生……我々は多年の苦辛空しからず、蘇山先生が茲に再生されたのを見て、殆んど夢のやうに思ひます、別けても冬子さんの、此數年間の勞苦は什んなでございましたらう、冬子さんは實に得難い孝女です、褒めて上げて下さい」
「ム、然うであらう、俺はこんな處で一旦死んだ故國の娘に逢ふなぞは夢にも

思はん、何事にも驚かんが、今日ばかりは殆んど失神しやうに思ふぢや、冬子の辛勞もさることながら、正也さんがなかつたら此大目的は遂げ得られなかつたのであらうと思ひますぢや、ア、ア、ア、夢だ、夢を見てゐるやうぢや」

「オ、お父様、眞箇に夢でございます、そして全く此所までかうして參りましたのは、正也さんの力でございます、正也さんがなかつたら、妾、永久にお父様にお目にかかることは出来なかつたのでございます、正也さんにお禮を……お萬望お禮を仰有つて下さい」

「禮の一言や二言、口でいふて何んになる……俺は再び、日本の土を踏まぬ覺悟でゐたのぢやが、國を去つて十五年、今汝達と會つて、片時も忘れ得ぬ故國の山水が目に浮かぶわ、煩惱が燃えるわ、不思議ぢや、冬子の身、惹き附けられるやうに感じるわ、ドレ、冬子、一度その顔を見せてくれい」

流石の蘇山も感極つてか、殆んど吾を忘れた態で、冬子を引き寄せ、沈と其顔に

見入つたが。

「ウム、幼顔がそのまゝじや、目と云ひ鼻と云ひ、母に生き寫し、俺は此處に成人した汝を見て、我子とは思はれん、死んだ母のきくを見てゐるやうに思ふじや、而して甚兵衛も達者か、ウム加藤も、モウ老人になつたか、ナニ池田は死んだと……ウム……それから、アー、一時に走馬燈のやうに、忘れてゐた昔が目の前に歴々と映る、不思議じや、俺は貴下に謝する詞を知らん、俺は子といふものゝ愛を知らなかつた、生れて六十年、今、今、此の刹那、初めて子の愛に接しましたじや……不思議だ、不思議だ……」

蘇山は一種言ふべからざる感情の興奮を覚えて、冬子を抱いたまゝ、他愛もない姿である。

「俺の滿洲生活は……國を去つて、此部落を保つたとは……アー、夢じや、無意味であつた。」

蘇山は感慨無量の體である。

(三十七) 邊寨の怪傑 (其四)

金田父子と正也との間に物語られた過去の談話は、賤の小田巻、語れども語れども、滾々として泉の如く殆んど盡る所を知らぬ、正也は漸く話頭を轉じて、かの狼群の襲來を避け、崖下に落ちて怪しい土人に救はれた時、自分は金蘇山を尋ねるのだと云つたにも拘らず、故に知らぬふりを装つて、其實此處に伴つて來た、合點の行かぬ行動を訝しんでそれを蘇山に質した。

「その時から、先生の名を云つたら俄に驚いたから如何も合點が行かないのです、我々は初めから此處へ來るのだと云つてゐるのですから、一言アノ土人が云つてくれたら、喜んで來ましたものを……妙なことをする奴です」

「イヤ、それは開うでないぢや、それだけ郭子唐が俺の命令をよく守つてゐるのぢや、彼處は一體此部落、此處は日本村ぢや、此日本村の見張所ぢや、つまり哨兵所どもいふべき所だ、此處を中心として四方にあゝいふものが設けてある、萬一日本人ども思はれるものが通行して危難にでも逢ふか、然もなくば道に迷つたものでも探したら、必ず丁重に取扱つて、たゞ黙つて何とも曰す、捕虜にして此處へ連れて來いと命じてあるのぢや、だから彼はその命令通りを實行したまでぢや」

「なるほど、それでよく事情は判りましたが、それにしても、何故先生は日本人と見たらそんなことをなさるのですか……」

「それは滿洲の土人と化しても、故國が戀しいからぢや、日本の帝國を戀しい土地ぢやせめては、日本人に會つて故國の噂を聞かうといふ、誠に敢果ない樂みに過ぎないのぢや」

「先生は、そ、それほど、故國をお慕ひ遊ばすのに、況して冬子さんといふ遺子ま

であるのに、一體何故にその日本の國を捨て、こんな人跡の稀な土地に隠れて了つたのです、そ、それが私輩には少しも判りません、恐らく先生を知るほどのものは皆その疑問に囚はれてゐるのだらうと思ひます、それを聞かしてください、先生は一體何んの目的を以て滿洲に隠れたのでございますか……」

「フム、それか、要するに豪傑病ぢや、空想に囚はれたのぢや、然し俺が本國を去る時に懐いてゐた目的は失敗に了つたのぢや、失敗の歴史を語るのは好ましくないが、志を共にした池田の息子ぢやから話して置かう」

五郎は夢の如き追懐を追うて、感慨無量、眼を閉ぢて考へてゐたが。

「要するに、赤手空拳、滿洲を日本帝國の版圖に入れやうと企んだのぢや、滿洲の土人を征服し、懐柔して之を俺の配下に從へて土人を盡く日本人にして、一村を化する毎に本國の同志を招いて之れを統率させ、露國の勢力を驅逐しやうと企てたのぢや、その第一の同志が君の老父じやつた、老父は何もかも當時のことはよく知つ

てゐるのじや、然しその事業は空想と實際と全然正反對で、却々思ふやうにならん
満洲に着眼して此大陸に日章旗の村を建てやうとしたのは失敗じやつた、その中に
日露戦争が初まつて俺の目的が此戦争の結果に依つて定まることゝなつたので、俺
は目的を變へて馬賊になつた、馬賊と曰つても掠奪をやるのではないぞ」

(三十八) 邊寨の怪傑 (其五)

金蘇山の金田五郎は更に詞をついで。

「馬賊とはいふが義軍じや、特に掠奪した事もあるが、それは不義の財を奪つて散
するのじや、日本などでは行ふべからざることだが、満洲では當時然ういふことも
必要であつたのじや、それで俺は日本帝國の國民として義軍を花田とふ中佐に貸
したのじや、イヤ俺は出ない、俺が出づべき場所でないから出なかつたのじや、た

いそれとなく配下の義軍を提供したのじや、アノ郭子唐などは當時二十四五の青年
で、慄慄と曰はれたほどであつた、此義軍は多大の成功じやつた、特別任務の満洲
義軍と言へば大したものじやつた、之が俺の志の變態であつた、その中に日露戦
争は成功して俺等が早く目を着けた處は、忽ち帝國の勢力圏に落ちたので、俺も、
もう用のない身體、ブラリと本國へ歸るつもりであつたが、懐柔した子弟が俺を慕
つて放さん、本國に渡してくれんのじや、俺も本國へ渡つた處で仕方がない、また
數百の子弟と離るゝにも恐びない、それで土人と化して満洲の土にならうとかうし
てゐるのじや」

金田五郎の金蘇山は、本國を出て以來の經過を詳かに二人に物語つた、沈と耳
を澄まして其の興味ある物語りに聞き惚れてゐた正也は、思はず手を拍つて。

「實に聞くさへ肉の躍る愉快な物語りです、志を同じうした父は何故早く來なか
つたのでせう、それが残念です、何故先生は父を呼んで下さらなかつたのです、そ

れがために父は下らない一代言人で窮死してしまいました」
「イヤ、それは不可ん、俺が池田と約束した計書は破れて了つたのじやから、池田を呼ぶ譯には行かんよ」

「それでも私が聞いてゐる所に依ると、先生の配下に数名の日本人らしいものがあるといふことですが、それは先生の故國の同志、若くは養つた書生じやアないんですか」

「そうではない、日本人は三人ばかり居る、確に居る、それは皆戦争當時の兵士だ我義軍の手に助けた兵士だ、本國では定めし生死不明として今日では戦死者同様の扱をしてゐやう、そんな連中が本國へ歸らないで、俺を慕つて茲に止まつてゐるのじや、妻子も何もない、つまり繁累のない暢氣者じや、今では皆土人を妻にして天下泰平に暮してゐる、何れ引合せもしやう、また土人の中には三國志の豪傑のやうなものもある、此一廓はすべて俺の支配の下にある一部落、一大家族じや、此一

部落はすべて俺の家族じや」

「そうですか、謂はゞ一種の理想郷でございますな……なるほど、それでは愉快でございませうよ」

正也は五郎の談話を、漂流記でも聞く様な感じで面白くきいてゐたのであつた、黙つて恍乎とその話を聞くが如く、また聞かぬが如く、懐しい父の一舉一動に見惚れてゐた冬子は、此時父の袖を控へて。

「お父さま、お父さま、斯うして妾が遙々と迎ひに参りました以上は、もうすぐに日本へ歸つて下さるでございませうね、何時歸つて下さいますえ、お父様！」
冬子は甘へるやうに、父の顔を覗き込んで、斯う聞くのであつた。

(三十九) 邊寨の怪傑 (其六)

冬子が突如の此質問には、流石の金田も少し面喰らつて、頓には返事も出来なかつた、冬子は焦がしさに。

「お父様！お返事は出来ないのですが、ええ、お父様！」

「フーム、出来ないとはいはぬ、然し我が子一人のために、一旦滿洲の士に化すと覺悟して、かういふ一つの部落を作つた身である、俺が去れば、此樂い大きな家族は皆離散して了はなければならぬ、それが不惑じや、縦へ異郷の土民にもせよ、今は俺を父とも母とも思つてゐるものじや、この澤山の孫や子を捨て、俺は此處を去るに忍びない、改國の山河は戀しい、生れた故郷の土を踏みたいと、俺も人間である以上は思はぬことはない、けれども、數百の子孫を残して、一人の子のために此處を去ることは出来ない、汝へは日本へ一緒に歸れば、俺は此數百の家族を汝一人の爲に犠牲にすることになるのじやアないか、金蘇山は左様いふ不義を行ふに忍びない」

と、斷乎として言ひ切つた、冬子は思ひも依らぬ父の詞に、全く失望してただ泣くより外はなかつた、蘇山も流石にそれを憐れと見たか、その背を撫でよ。

「冬子！冬子？、汝、俺に日本へ歸れといふのは慘酷じや、父を此處まで慕つて尋ねて来てくれた汝じや、俺の心を察するならば、汝が正也さんと共に此處に止まつてくれ、然うすれば永久汝と父とは一つ所に暮らすことが出来るではないか、此荒涼凄慘たる土地に、花の如き汝を止めやうといふのは無理かも知れん、然し父をして無情の父たちしめず、無情の人だらしめまいと思ふなら、然うしてくれ……」

蘇山は真心籠めて冬子を説いたが、やがてまた池田に打ち向ひ。

「池田さん、之は冬子にこそいひ得ることで、貴下には曰ひ得ないが、什麼です、冬子を助けて共に此處に止まつては下さらんか」

池田は蘇山の詞は有理と感しながらも、冬子の心を付りかね、俛首れて思案しつゝ、窃に冬子の答へを待つのであつた、彼は冬子に止まる決心があれば自分も止ま

る覺悟をしやうといふ腹らしい。

冬子は此時ソツと面を上げて。

「お父様？、では斯うして下さい、日本にはまだ甚兵衛も残して参りました、甚兵衛は養育の大恩ある假の親でございます、妾の歸る日を指折り數へて待つて居ります、一緒に連れて行つてくれと新橋で流車を追ひかけた妾がまだ目の前に残つて居ります、それに加藤大佐もお父様のお消息を聞かうと待つてゐるのでございますから、長くとは申しませんが、兎に角一度日本へ歸つて、お父様の無事な顔を皆に見せて、而してまた此處へ歸つて参りませう、お父様！、如何か之だけは許して下さい之だけは聞いて下さいまし』

冬子は潜々と泣いて頼み聞へた、蘇山も道理ある此詞まで却けることは出来なかつたのである。

「それも無理からぬこと、兎も角も暫く此處に止まつてくれ、その中に機會を見て

此家族に得心させ、汝の希望に副ふやうにしやうから……』
と、僅に冬子を慰めた、池田も之は望む所であつたらしい。

(四十) 可憐の少女 (其二)

冬子は多年の望み一朝にして茲に達せられ、生死さへ不明であつたその生みの父にゆくりなくも邂逅ひ、父と未來の夫と、此邊寨に樂い團樂をして、荒涼寂寞の中にも春の如き歡樂を味はひ、機會を得て、一まづ又と共に東京に歸る日を指折り數へて待つてゐた、冬子は東京に歸つて、花々しく正也と結婚の式を挙げ様といふ希望が輝いてゐたのであつた、然しまた機會を得ないので此事のみは父に明してゐなかつた。

此邊寨の陋屋に又と同居しても、冬子は人目を憚つて依然男装をつつけ、土人の

男と變装してゐたのであつた、正也も亦茲に落ち着いた以來は、蘇山の注意で之も姿を土人に窺してゐた、然し二人は父から公然と許しを得るまではと、互ひにその身を慎んで、假りにも人の疑を招くやうな行爲は之を避けて注意に注意を加へてゐたので、その親密の度は是處へ來てから却て殺がれた如き感があつた、況して此部落の土人なぞ二人を戀人同志と思ふものは一人もない、二人は之のみを物足らず且つ憂事にしてゐたのである。

此部落の副統領ともいふべき人に張子繼といふ豪傑があつた、三國忘の張飛か關羽でも見るやうな男で、もう五十の坂を三つ四つ越してゐる、金蘇山の無二の股肱で、蘇山の爲には水火の中をも辭せないほど心服してゐる、蘇山につぐ部落の人望家で、勇もあれば義もある男であつた、滿州土人には珍らしい性質である。

その子繼に一人の娘がある、今年十八で名を鳳春と言ふ、此の部落のみは女だからとて翠帳深く閉じ籠もつてゐるやうなことはない、蘇山の主義として自由の天地

に自由の空氣を呼吸させてゐる、たゞ男女の間の禮儀のみは頗る喧しく、且つ嚴重な制裁が設けられてゐるのであつた。

部落にも相當に女はあるが、鳳春はわきても美しい、土人の娘に似合ぬ色も比較的白く、支那式の圓顔で愛嬌のある、此邊では一際目に立つ嫵緻であつた、殊に無邪氣で快活で少しも其の心に曲けた分子や蟠つた處がない、誰にでも懐いてよく笑ひよく遊び、よく働いてゐる。

女性の冬子は此鳳春が大好きであつた、十日と二十日と茲に慣れるに従つて、冬子と鳳春とはすつかり仲よしになつて了つた、寂涼たる滿州で、這んな無邪氣な少女を得た冬子は、天にも地にも換へ代へないよいお友達と思つた、鳳春は冬子と女とは知つていた、それは父の子繼から秘密に聞かされていたからで、男装していても女と云ふだけに隔てなく、心置きなく遊べるのに鳳春に取つては又此上もない愉快であるらしい。

正也も冬子も通じて鳳春を知り、之も其無邪氣なあど氣ないのを可愛がつていた冬子と正也との戀の懸橋は、鳳春が無意識の中に媒介つてゐるやうな觀がある。

正也と冬子が蘇山の許に身を寄せてからもう半歳の餘にもなる、冬子の歸心は矢の如く、日夜毎父を口説いては、一旦東京に歸ることを懇請してゐた。

雪も解けて、荒冷凄惨たる滿州の廣野にも春は廻つて、日一日と氣候が暖くなり其所あたりの赤い禿た山に、緑の色が漸く濃くなりまさつて來た、冬子の歸心はいよいよ矢の如くである。

(四十一) 可憐の少女 (其二)

天は麗らかに日影は長閑である、正也は久しく雪に閉じ籠められて、寂寞と無聊に苦しんでいたが、今日は滿洲に這入つて初めて見る長閑な景色に憧れて、出ると

もなく冬子を誘つて、そこはかどなく山野をそゞろ歩いた、大陸の荒つばい景色を故國の細微なる風色を思ひ比べて、二人はたゞ上野や向島の春が思ひ出されてならなかつた。

丘に登り小川を渡つて、部落の後の山の根まで來た、二人は其所の小高い丘の上つて崩え出でやうとする若草の上に腰を下した。

温爐の暖味にばかり親しんだ冬籠りは、もう、飽き／＼しましたねえ、かうやつて這んな邊寨にも、春が回つて來るのに、我々二人の運命には如何して、まだ春が回つて來ないのでせう、冬子さん、貴女まだお父さんに我々二人の戀仲を、打ち明けては下さらないのですか、何時までも／＼斯うして人目を憚つて暫時の歎樂に酔うといふ果敢ないことは、もう僕の堪へ得る所でないのです、二人が誰に氣がねもない、自由な語らひをされる身になつたら、此無趣味な世界でも何んなに樂いでせう、夫を思ふと、もどかしくつて／＼堪まらないのです、ねえ冬子さん、思ひ切つ

「早く打明けて下さい、その上でまた覺悟のしやうもありませんから……」

正也は久しく垂れ籠めて、親しく語らう機会を得なかつた胸の、遣る瀬ない思ひも今日こそはと、打ち附けに冬子に説くのであつた。

思ひは同じ冬子も、正也に斯う言はれるだけ、それだけ一入苦しいのであつた。

「辛い苦しい思ひを忍んで、是所まで父を尋ねて参つたのも、此目的を果した上で公然の夫婦と言はれたばかりの希望、父の許しを得て結婚しやうといふ樂みを有つていたればこそでございますわ、而して父を伴れて歸つて、父子夫婦樂い團樂をした計りに遙々來たのでございますもの、毎日々日父にせがんで歸る日を指折り數へて待つていたのでございます、それさへ決ればすぐにもあの話を切り出さうと思つていたのでございますけど……」

「それは別として、兎に角結婚のことを切り出して下さい、然うすれば自然歸る日

も極りませう、極らなくとも二人が樂しい天地を翻けられるならば、僕は厭ふ所ではないのです、喜んで滿洲の土になります、冬子さん、何故斯う人事意の如くならないでせうねえ、僕は悶かしくつて悶かしくつて堪まらないのです」

「眞箇に濟みません、正也さん、ゆ許して下さい、思ひ切つて屹度々々今日にも機を見て父に打ち明けます」

冬子は情激してか、人目なき此丘の上に正也の膝に面を伏せて心ゆくまで泣いた正也もその手を取つて熱い接吻を與へ、二人は東の間の歡樂に酔つていたのであつた。

此時、靜に丘に上つて來るものがあつた、それは可憐の少女張鳳春である、何氣なく其所まで來て、不圖二人の姿に目を移すと、冬子は正也の膝にその面を伏せている、ハツと思つて立竦んだが、また思ひ返してツカ／＼と正也の後に廻つて。

「ア、貴下何しています……」

ど、聲をかけた、二人は吃驚して其所を飛び退いた。

(四十二) 可憐の少女 (其三)

鳳春はジロく不思議さうに二人の顔を見比べて立っている、冬子は何氣ない體を装つて。

「マア、鳳ちゃん、吃驚したじやアありませんか、黙つて上つて来たの、人が悪いこと、オホー」と

ど、テレ隠しに笑つたが、それでも流石に極りが悪かつたか、顔を赦めていた、正也は、たゞ笑つて鳳春の面を腫めている、鳳春は何時にない不快な顔をして。

「冬子さん、何泣きました、妾、可笑しい、正也さん、貴下、此の女妻ありますか」

ど、露骨なことをいふ、正也は慌てゝそれを打ち消して。

「そ、然うじやアない、そんな事を皆に言つてくれば困る、今ね、日本が戀しいので、早く歸りたいッて、二人でツイ泣いていたのだよ、そ、そんなことはない……」

「然う、でも皆、日本歸らない、是處の人になるありませう」

「然うだけれども、是處の人になるには一度日本へ歸つて、日本の家を取纏めて来なければならぬから、ただチョイと歸つて来るのさ」

「然う、それ宜しい……」

ど、鳳春はヤツと得心したらしく冬子に向つて。

「妾用忘れていました、金大人、冬子さん、呼んで来いッて、妾、彼處是處大變探すことありました」

「然う、それはマア、お氣の毒でしたわね、じやア正也さん、妾行つて来てよ」

「おう、僕もモウ歸らう、アツ、今のこと先生にねえ、冬子さん」

「エえ、今日は屹度言ひます、長閑ですから正也さん、貴下鳳ちゃんと一緒にモツと遊んでいらつしやい」

「正也さん、妾一緒に遊ぶ宜しい、可矣ところ連れて行きます、ねえ、一緒に行きませう」

鳳春は両手で正也の手を曳いて放さうともしない、正也は莞爾して、仇氣ない鳳春の姿に見入り。

「鳳ちゃんそんなにどめるんだから、じゃア僕はモツと遊んで行かうかね、冬子さん、そんなら早く先生の處へ行つていらつしやい」

冬子は領いて丘を下りて行つた、鳳春は嬉しさうに正也の面を打ち成り、手を取つたり、服を引いたり無邪氣に戯れながら、何時か丘を下りて、道祖神の森の四邊まで来た。

「正也さん、貴下日本へ歸る、何時歸ります……」

鳳春は突如にかう聞いた、正也は何んの氣も附かず。

「さアまだ何日も極まつてはいないんです、然し何れ近い中には行くよ、鳳ちゃんは少し淋しからうね……」

「妾、淋しい、妾、日本行きたい、正也さん一緒に連れて行く宜しい……」

「ナニ、鳳ちゃんは行き度つても、お父さんが不可ないと曰ひますよ」

「お父さん不可ないといふ、妾、無理に頼みます、貴下連れて行きますか……」

「アハハハ、大變な熱心だね、お父さんが可矣といへば連れて行くともく」

(四十三) 可憐の少女 (其三)

「きつと、正也さん、屹度連れて行くありますか……」

鳳春はその態度、その容子、頗る眞面目であつた、正也はそんな素ぶりには氣も付かず、初めから擲擲うつもりで、切りに笑ひ崩れながら。

「屹度だともく、然し鳳ちゃんは何してそんなに日本へ行きたいのだ、日本の事でも何か聞いているのかい……」

「いゝえ妾、日本の事少しも知らない、貴郎歸る、淋しい、妾日本見たくない、貴郎一緒に行く嬉しい」

「エーン、日本は見たくないが、僕が歸ると寂しいから一緒に行く……」

正也は初めて異様な鳳春の詞に驚いて、思はず彼の面を見た、鳳春は顔を眞赤にして、その無邪氣な態度は何處へやら、艶姿を作つて媚びるやうに正也を窺み見るアムく、鳳春はモウ無邪氣な少女では無つた、正也は何事かその胸に直覺すると共に、悚然として身を慄はした。

「貴下、連れて行きますか、正也さん、貴下、妾好き？嫌ひ？貴下好きといふこと

ありました！」

「フム、僕は鳳ちゃんが好きだ無邪氣だから好きだが、無邪氣でなくなつたら嫌ひになるよ」

正也は少し狼狽してかう答へたが、彼の舉動には今までと違つて、鳳春を警戒する氣色が見えた。

「無邪氣好き？、妾無邪氣よ、何時までもく好きでいて下さい」

「無邪氣なら何時までも好きだから、無邪氣でお出なさい、可いかい、さア判つたら、モウ遅くなつたから歸らう、歸りませう、歸つて冬子さんと三人で、また日本のお話をして上げるから……」

正也は今二人でそぞろ歩くことの頗る危険を感じたので、詞巧に鳳春を賺し宥めて歸らうとする、鳳春は何となく引立たぬ氣色で、歩みを返したが、その目には何時か露を宿して居た。

正也はそれを哀と見て、優しく手を引いて。

「如何したの、鳳ちゃんは急に萎れ返つて、如何したのだ、可笑しいよ、先刻私達が日本へ歸りたいつて泣いていたら、鳳ちゃんは笑つたらう、その癖に自分も泣くなんて可笑しいじゃアないか、例時のやうな元氣を出して、さア、活潑に歩いて行かう」

と、その手を引いて、滑稽交りに先に立つて行くが、鳳春は手を引かれたまゝ、やはり沈み勝で、俯向いて一言も答へない。

「そんなに曲ると、もう鳳ちゃん一人置いて、僕は先へ行つて了うよ、それでも可いかい」

鳳春はまだ點つている、而して何を思ひ出したのか、俄に道の傍に跪いて、何か祈念するやうに天に向つて禮拜し、正也が呆氣に取られて、それを腫めているのを、矢庭に走りかゝつてその胸に取り付き、ヨ、とばかりに泣き崩れた。

正也は途方に暮て、何と云つたものかと徒らに茫然としている、鳳春は絹を裂くやうな悲痛な聲を振り絞つて。

「まゝ、正也さん、妾、今日から無邪氣なくなります、貴下、妾嫌ひ？、捨てますか」

ア、可憐の少女張鳳春は戀を知り初めたのである。

(四十四) 別離の涙 (其一)

「ではお父様、正也さんとの結婚をお許し下さいますか、アノ、眞箇にお許し下さいますか……」

「許すも許さぬも、俺は親としてそれに立入る権利はない、今日まで二人が苦節を全くして、互に相許してゐたなら、それはモウ既に夫婦じやく……」

「でもお父様の口からただ一言許すと仰有つて下さい、そのお詞を聞きたいばかりに、今日まで二人は切ない情を堪へてゐたのでございます」

「ナニ、許すといふ詞が聞きたい、然うか、それは是處では曰ぬ、一まづ日本へ歸つた後ぢや」

「エーッ、そんなら愈日本に歸るのでございますか……」

「時機も熟したやうじやし、氣候もよくなつて來たから、萬事は張子繼に一任して汝なり、正也さんの爲に、此懐しい部落を出發する」

「ア、有難うございます、お父様、有難うございます……」

「アツハツハムム、嬉しいか、子故には鐵石の心も溶けるわ、正也さんにもよくその話をして、用意をしたらよからう、俺は此事を皆に傳へて、得心させねばならぬ。」

蘇山は斯う曰つてそのまゝ其處を出て行つた、冬子は思ひも依らぬ父の詞に、夢

かどばかり打ち喜び、すぐに正也の室に駆けて行く。

金蘇山は冬子の切なる願ひに、且つは故國の態なぞ打ち聞いては、流石に望郷の念止み難く、終に此機會において一度日本に歸り、正也の厚情に酬ゆるため日本において二人の結婚式を上げさせて、忠實の老僕甚兵衛にも逢ひ、加藤大佐にも會見して、過ぎ來し方の懷舊談に耽り、更に堂々此の日本村に歸城しやうと意を決してまづ張子繼にその旨を告げ、留守中の監督を懇に依頼し、子弟を集めてその旨を披露に及んだ。

日本村の一族數百人は名残を惜しんで、皆涙を垂れ、一人として仰ぎ見るものはない、蘇山は聲を勵まして。

「長い間ではない、俺は決して皆のものど別れるのを快しとはしてゐない、三四ヶ月の後にはまた是處へ歸つて來るのじや、俺は汝方の親じや、親が子をすてる譯

はない、目出たい首途に涙は不吉だ、快よう酒を飲んで門途を祝つてくれッ』
と、叱るやうに慰めるやうに言つたので、數百の子弟は漸く涙を拂つて、異口同音に金大人の幸多かれがしと祝福する。

ただその中に一人、満座の隅の方に小さくなつて、何時までも涙を拭つてゐた可憐の少女があつた、それは云ふ迄もない張鳳春である。

一同は金大人から振舞はれた酒と馳走に舌鼓を打つてゐる間も、鳳春のみはまだ涙を飲んでゐたが、終に座にも堪へかねたか、そのまゝソツと其處を忍び出で姿を隠した。

暫くすると鳳春は、足音を忍んで、正也の室の此方にその姿を現した、室内には正也が冬子と二人、今何か樂さうに密々と物語りを續けてゐる處である。

鳳春はやをら其窓下に忍んで身を屈めつゝ、二人の談話に耳を聳てた。

(四十五) 別離の涙 (其二)

冬子は父蘇山から言ひ聞かされた歸京のことを正也に物語り、結婚についての樂い希望などを語り明すのであつた。

「正也さん、妾、ただ夢のやうで、何だか氣がわく／＼して天に浮いて行くやうで……」

冬子は何か幻影でも趁ふ如く、樂さうに、正也の手を取つて斯う云つた、正也はただ無言で笑つてゐる、やがて何事に驚いたのか彼は冬子に向つて。

「冬子さん、今我々が出發するについて、茲に一つの憂ふべきことが生じました、外でもありません、あの無邪氣な張鳳春、その鳳春はもう無邪氣な少女ではないのです、ば、僕は彼の志を憐れみますが、と、兎てもその希望を充たすことは出来

なら、鳳春は僕に、日本へ連れて行つてくれといふのです」

「な、何でございますつて、あの鳳ちゃんか……まア……貴下に戀をして……」

冬子は流石に安からぬ色を見せて、その膝を乗り出しつゝ、キツと正也の氣色を窺つた、正也は目を閉ぢ腕を組んで。

「鳳春の志は憐れみですが、之を同行することは出来ません、それで何んと言つて彼を慰めやうか、清い少女の誠を傷つけて偽はりを言ふには忍びません、僕は出發するに際して、彼にその事情を打ち明け諦めさせやうと思ふのですが、冬子さんは如何思ひますか」

「そ、それは……それが宜しうございます」

と、いふ時、窓外に當つて、たいならぬ物音が聞えた、二人はハツと胸を打つて顔を見合せ、慌しう音する方に駆け附けて見ると、這はそも、可憐の少女は鳳春は短劍をその心臓に貫いて、其處に倒れてゐるのであつた、四邊は血潮に塗れて物凄

い。

「ヤッ、こ、之は鳳春か、ど、如何して自害したのです……」

正也は走り寄つて、之を抱き起した、冬子も驚いて身を震はしつゝ鳳春の前に進み出て。

「鳳ちゃんは今の話聞いてゐましたね、そ而して自害をしたのですね……」

二人は右と左から之を抱き起して介抱したが、鳳春は見事に心臓を刺し、且つ返す刀で咽喉を刺つて、既に息は絶えてゐたのであつた、呼べど叫べどその紅魂はモウ返らない、月は中天に懸つて、蒼白いその死顔を照らした。

鳳春の自殺は父子繼の計らひに依つて、金大人が出發するまではと、そのまゝに秘せられて、而して病氣を稱し自邸の奥の室にその亡き骸を横へた。

蘇山は愈三日目の朝、冬子と正也を引き連れて此村を出發した、日本村の老幼

男女は群をなして數里の遠き地點まで之を見送つて名残を惜んだ。
 一行は宿りを重ねて無事に鐵嶺に着し、流車で大連へ、大連から船で神戸へと向つたが、蘇山が鐵嶺に着いてからはモウ全滿洲の評判は頗る高くなり、彼はやはり日本人で故郷へ歸るのであると、有志者は逸早く之を流車や流船に迎へて、懇篤に歓迎した。

十數日の後、一行は東京に這入つた、朝野の名士は金田五郎の再生を祝して、新橋驛は人を以て埋められた、蘇山は夢に夢見る心地であつた。

正也と冬子の結婚式は、金田五郎の娘として盛大に舉行された、その時、その日二人の感慨は這んなであつたであらう、式が済むと二人は哀れな鳳春のために盛大な供養を本願寺で營んだ、人は前代未聞の結婚式だと噂して目を聳てた。

蘇山は滞在一二ヶ月にして、忠實な老僕甚兵衛を従へ、滿洲の土となるべく、かの日本村に引つ返した、二人は尙東京に止まつてゐたが、之も遠からず滿洲に赴く

おとし兒(後)編終

和 田 天 華 氏	著 述 目 録		
静 二 弱 浪 戀	人 の 意 氣 地	子 女 人 地	おとし兒
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
全三冊	全三冊	全三冊	全三冊

と曰つてゐる。
 緒方政雄は一たび加藤大佐にその素性を洗はれてから、誰いふとなくその人格を非難し、果は新聞紙にまで其名を呪はれて、東京を這々の體で引き上げ、熊本在の故郷に引退して世と遠ざかつた。

大正四年六月八日印刷
大正四年六月十二日發行

定價金四拾五錢

樋口隆文館

營業案内

樋口隆文館は主として小説の出版及び其卸賣を専業とし、諸君に付各地方の販賣業者致居候に及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候
△卸賣目録御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ
△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新刊發行致べく候
△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候
△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

著作權所有

【附與編後見しこお】

著作者 和田 天 華
發行者 樋口 源 次 郎
大坂市南區鰻谷中之町
二百二十四番屋敷
大坂市東區博勞町
一丁目三番地
印刷者 宮 野 孝 恩

發賣元

大坂市南區三休橋鰻谷南入西側

樋口隆文館

(振替口座大阪八七九七)

青 峯 作

小説女小説家

頗美本
全壹册
實價金五拾錢
送料金六錢

冷熱の烈しい日本文壇は堂々たる有聲の文學者をすら、一浮一沈に漂はせて居る、況や纖弱の
一婦人にして此の渦中に入る、甚麼に彼女が浮世の浪風に揉まれ、而して亦不思議
な運命に遭逢するかを看よ、著者は知名の某文士、仮りに覆面して青峰と名告れり、乞ふ、
其文を味はふて其何人なるかを察せられよ。



稻岡奴之助君著 小峯大羽君畫

小男禁制

極彩色木版畫挿入
實價四十五錢
送料六錢

あながち藝妓ばかりぢや無い、堂々たる一國議政の代議士でさへも、金力次第で何方へでもといふ、黄金萬能の現代に於て、さても珍しや、金力に轉ばず權勢にも靡かぬは、今新編で賣出しの流行妓、藝も達者なれば面も申し分無い、男禁制藝妓の萬叶屋の玉吉である。掲げた金看板にケチ風の掛直も無く、藝と愛嬌以外の物は、大臣であらうが元帥であらうが、モルガンであらうが、今丹次郎であらうが、一視同仁平等無差別、誰彼無しに御断り申すと、強ど拗たる枝振の面白さ、天晴名花よこれ手折らすほど、其道にかけて無敵の猛者といはれし、現代屈指の三富豪が、一萬圓の懸賞で時日を限り、鎗を削り火花を散らして、女退治の大競争をやるといふ、一寸風變りの面白い小説は此男禁制!!!

江見水蔭君作
八幡白帆君畫

三怪人

各冊共木版
極彩色密畫挿入
全四冊各一冊
實價金四十五錢宛
送料四冊二付八錢
但シ内地限り

怪賊の一團あり、其行動の幻奇妙怪なる、實に神沒鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻惡辣を極め、近時有名なりしデゴマ、ボンノ一の徒輩をして、遠く三舍を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戰慄すべき惡争苦闘を経たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を削り肉を刻む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつてす、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお奨めをする。

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀罪

全二册
美術木版口繪挿入
各一册實價五拾錢宛
送料二册二付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とたへられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か陰れたる大なる秘密が無ければならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に同情の涙を濺かしむる悲痛凄慘なる、且美しき物語があるのだ。

大阪新報記者

山行友李風君作
本英春君畫

龜甲組

(木版極彩色頗美本)
全三册
實價各一册金五十錢
送料一册二付六錢
三册二付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騒がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

渡邊默禪君作

口繪者 歌川國松君 洗馬君 鈴木錦泉君

川上恒茂君 長谷川小信君

艷麗極彩色 口繪挿入美本

日本新聞

千里眼

掲載小説

横山花子

全三冊二付

實價一圓四十錢

(送料共にて)

全二冊二付

實價金一圓

(送料共にて)

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の一美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲惨骨を剝り肉を刻むの消息がある。彼女の父は東京府の參事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歳、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となりて天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の経路を寫す間に、靈と肉との戦ひ、個人と社會の葛藤の如何に險峻烈なるかを説きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其内容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誕らざるを知られよ。

117
229

終

